

アレクサンドリアのクレメンス  
『ストロマテイス』（『綴織』）第2巻  
—全訳—

秋 山 学

序.

本号には、クレメンスの最大主要著作である『ストロマテイス』（「綴織」、全7巻；第8巻は偽作の可能性が高い）のうち、第2巻の全訳を掲載する。第1巻の全訳は、本号と同時に公刊される、『文藝言語研究』の「文藝篇」を参照されたい。『ストロマテイス』ないし依拠したテキストの解題、あるいは本訳があくまでも試訳としての意味を持つものであるという点に関しても、同篇を参照していただければ幸いである。

なお、この『ストロマテイス』第2巻の後半、およびこれに続く第3巻には、クレメンスの結婚をめぐる神学が開陳されている。これは、司祭の独身性を定めているローマ典礼教会の神学とは異質なものであり、東方典礼教会が、叙階前の司祭候補者の結婚を認めていることなど、東方典礼に固有の結婚の神学の典拠としてしばしば引かれるものである。もっとも、クレメンスが他の教父たちとは異なり、結婚の意義を称揚する点は大きな価値を持つものの、言うまでもなくその結婚観は、現代世界にそのまま受け入れられるとは思えない旧式の倫理観に基づくものである。本拙訳は、あくまでも原典訳の試みとしてのみ受け取っていただきたいということを、あらかじめお断りしておく。

近代語訳としては、イタリア語訳（Clemente Alessandrino, *Gli Stromateis: Note di vera filosofia*, Introduzione, traduzione e note di Giovanni Pini, Milano 1985）、スペイン語訳（Clemente de Alejandría, *Stromata II-III: Conocimiento religioso y continencia auténtica*, Introducción, traducción y notas de Marcelo Merino Rodríguez, Madrid 1998）、および英訳（*Clement of Alexandria: Stromateis, Books One to Three*, translated by John Ferguson, Washington, D.C., 1991）を参照した。見出しに関して、ミーニュ版のラテン語訳から適宜訳出した点に関しては、第1巻の場合と同様である。

## I. 序.

1.1) さて続いては、聖書がギリシア人のことを、異邦の愛智の「篡奪者」であると述べていることからして（ヨハ10,8）、このことが、個々の点に関して、どのように示されるかについて扱うことにしたい。というのもわれわれは、われわれの許で語られる奇跡を彼らが模倣しつつ記述しているということばかりでなく、それに加え、教説のうち最も肝心なものをも彼らは剽窃し捏造しているということを提示するつもりだからである。この件に関しては、すでに示したように（『ストロマティス』1.21.101以下）、われわれの許にある書物のほうがより古くに遡るのであり、これをわれわれは、信仰、智慧、覚知と知識、希望と愛、回心と克己、さらには神に対する恐れ（つまり、間違いなく真理の「諸徳の群れ」【プラトン『メノン』72a】である）。2) 記述の際には、当該の箇所での注記が要求する限りの事柄が取り上げられるであろう。そしてとりわけ、異邦人の哲学の秘せられた部分、その象徴的性格と謎に満ちた種類を、古代の事柄についてさまざまに哲学してきた人々が、どのように探求してきたのかを問う。彼らはこれを、真理の覚知のために最も有用なもの、否むしろ必要不可欠なものであると考えたのであった。2.1) さてこの件をめぐり私は、ギリシア人たちがわれわれの後を追いかけている事柄に関して、彼らがわずかな書物を用いながら弁証しているのは当然のことだと考える。ユダヤ人にしても、ひそかに感づいて、信じてきた事柄から信じていなかった事柄へと転回することができたなら。2) しかるに、真正なる哲学者たちについては、彼らの生涯と、新たなる教説の発見に関して愛に満ちて吟味するならば、彼らを受け容れて当然であろう。われわれはその反駁者たちを擁護することはしない（それとはまったく逆であり、われわれは、たとえわれわれの言葉を、彼らが凌辱的だといって虚しく排斥したとしても、呪いを懸ける者どもを祝福することを学んでいる）（ルカ6,28）。むしろわれわれは、彼らの回心のために、もし万知に満ちた人々が、異邦からの吟味により節慮を得て恥じ入り、彼らが海を越えての旅に出発するその目的である教えが、一体どのようなものであるかを遅れて見抜くことができるようになれば、と思う次第である。3) というのも彼らのうちの窃盜者たちは、その自己中心性が取り除かれるならば、彼らが<自らを探して>見出したと誇っている事柄が明らかにされるであろう。そのための吟味なのである。一方、それに引き続いて「一般的教養」と呼ばれているものに関して述べ、また有益

である限りにおいて、天文学、数学、魔術的呪術についても駆け足で触れるべきであろう。4) というのも全ギリシア人たちは、これらのことを<最大の知だ>と豪語しているからである。<堂々と吟味する者は平和をもたらす>（箴言 10,10）。3.1) 既に度々、われわれは正しいギリシア語を話すことに尽力するのでも、それを事とするのでもないということを明らかにしてきた。そのようなことだけで、多くの人々を真理から逸らせるに十分だからである。しかるに真なる哲学的原則は、舌にではなくむしろ思慮に向けて、耳を傾ける人々を益するであろう。2) 思うに、真理を心に懸ける者は、概念や思念から表現を織り成すのではなく、むしろ望んでいる事柄をできる限り名づけることだけを試みるべきであろう。というのも言辞に囚われ、それに汲々としている者たちに対しては、事柄そのものが逃げていってしまうのである。3) したがって、とげの間に生えたバラを傷つかずに手折るのは、農夫にしかできない業であり、また牡蠣の肉のうちに深く隠れた宝石を見つけ出すのは専門家の仕事である。4) あるいはまた、鳥類がその肉の質を最も美味しくするのは、十分なだけの食糧を提供された場合ではなく、むしろ鳥そのものが自らの足で労苦して食糧をかき集める場合だと言われる。5) 従ってもし、多くの蓋然的なまたギリシア的な事柄のうちに、ちょうどお化けの装束の下に真の顔を隠そうとするかのように、真理を隠そうと望む者があったとすれば、同様の事柄を観想する者が、それに対してさまざま苦心して真理を追い求めるであろう。ちょうど、ヘルマスの幻影のなかに、真理が立ち現れたというように。<あなたにおいて秘密が開示されることが相応しければ、開示されるであろう>（『ヘルマスの幻影』 3.13.4）。

## Ⅱ. 信仰のみが、われわれの神に対する知識を可能にし、それは確固たる基礎に基づいていること。

4.1) <知恵に驕ることなかれ>と『箴言』は語っている（箴言 3,5 ; 6 ; 23）。<あなたの道のすべてにおいて知恵をわきまえよ。主があなたの道を正してくださるように。あなたの足が躓くことのないように>。主はこれらの言葉を通じて、行いが言葉に随うべきであるということを示そうとしている。さらに、われわれはあらゆる教養から有用なものを採り取って所持すべきであるということをも明らかにしようとする。2) 実に知恵の道は、真理の道に向けてわれわれの歩みを正すうえで多彩である。しかるにこの道とは信に他ならない。<あなたの足が躓いてはならない>（箴言 3,7 ; 12）と、主は、一にし

て神的な先見の計らいに対して抗うように見える人々に関して述べている。3) それゆえ主はこう付言する。〈あなた自身を思慮深き者と考えるはならない〉。つまりこれは、神の経綸に逆らう無神論的な考えに従ってはならない、との意味であり、〈唯一力ある方、神を畏れよ〉とされ、そこから「神には何ものも対立しない」という考えが伴う。4) とりわけ付加部は、神に対する畏れとは悪を避けることであるということをも明白に教え、こう語られる。〈あらゆる悪から遠ざかれ〉。これこそ知恵の教えである。〈主は、愛する者を教育する〉からであり、知解に向けて励むように仕向け、安寧と不滅に向けて再創造するのである。5.1) かくして異邦の哲学は、われわれが追究するところのものであるが、真に完全であり真実のものである。実に『知恵の書』ではこう語られている。〈その方ご自身が、わたしに諸事物に関する偽りのない覚知を与えた。宇宙の生成を知るわざを〉(知恵7,17.20)。これは続いてくさまざまな根の力を〉まで述べ上げられる。これらすべてのうちに、この著者は自然的な観想を貫いた。それは成ったものすべてに対する感覚的宇宙に関わるものである。2) しかし次いで、彼は思惟界についても次のように暗示して述べている。〈わたしは、隠された事ども・明らかなる事どもを知った。万物の匠である知恵がわたしに教えを授けたから〉(知恵7,21)。ここにあなたは、われわれによる哲学の告げるものを簡潔に有している。3) しかるにこれらに関する学びは、正しき生き方とともに鍛え上げられ、万物の匠である智慧を通じ、万物のおさである方の許にまで導き登る。その方は征服されえず、捕獲されえない方であり、常に退き、追究する者から遠く離脱する。4) しかるにその方自身は遠くにならぬ最も至近に近づく。これは語られえぬ驚異である。4) 〈わたしは近づく神である〉(エレヤ23,23以下)と主は語る。すなわち実体としては遠いが(どうして、生まれたものが生まれざるものに近づくことがあろうか)、その力においては最も近く、その力によって、万物が抱擁されるのである。5) 主は語る。〈もし誰かが何か隠れたことを為そうとも、わたしが彼を見ていないことがあるか〉。実際、観照・善行・教育に関わるわれわれの力には、神の力が触れ、介在するのである。6.1) そこからモーセは、神は、人の知恵によっては決して知られることはないという確信を抱いていた。彼は言っている。〈わたしのために、闇の中にあなた自身を輝かせてください〉(出エジプト20,21)。闇の中には神の声が響き、モーセはその闇、存在者をめぐって足を踏み入れることが叶わず目に見ることのできない思惟の中に入ってゆくことを強いられたのである。というのも神は、闇とか場所とかにいますわけではなく、場所・時間、あ

るいは成ったものの属性を超える存在だからである。2) それゆえ神は、何らかの限定ないし切断によっても、限り取ることも限り取られることもなく、部分において成立しない。3) <なぜならあなた方はどのような家をわたしのために建てようと言うのか>と主は言われる（イザヤ66,1）。神は容れられることがないため、自らのために神殿を建てることをしない。一方<天はわが玉座>と語られても、そのように限定されることもなく、むしろ創造の業を喜びとしてそこに休らわれる。4) かくしてわれわれには、真理が隠されていることは明らかであり、一つの範例からすでにどのように真理が示されているかについては、少しく後ほど、十分に提示することにしよう。7.1) どうして、学ぶことを欲し、それが可能でもある人々が、それを受けるに値しないということがあるだろうか。それはソロモンの言葉によっても明らかである。<知恵と教養とを知り、賢慮の言葉を思い、言葉による戒めを受け容れ、真なる正義に思いを致すこと>（箴言1,2-6）（ギリシア人や、他の哲学者たちの法によれば、真理に基づかずに教え広められている他の正義もあるのだから）、聖書にはこう語られる、<そして基準を正しくすること>、それは陪審員の仕事ではなく、われわれの内なる基準が、健全で惑いのないものでなければならない、と彼は告げているのである。それは<悪のない者たちにあらゆる事柄に対する業を、若者には感覚と良識を与えるためである。というのも知者は、これらの事どもに耳を傾けるのだから>。彼は掟に従う者たちを信頼し、覚知によって<より知恵に溢れた者となる>。しかるに思慮深い者は、舵取り術を身につけ、思惟によって比喻と難解な言葉を、また知者たちの言葉と謎を解き明かすだろう>。3) というのも、神からの息吹を受けた者たちは、邪悪な言葉を広めたり、神の言葉から脇へ逸れたりもしないからである。また、詭弁家の多くが若者たちを巻き込み、何ら真理に関わらないことに無駄な時間を費やすための罠を広めることもなく、ただ聖霊を極めた者たちとして<神の深み>を究める、すなわち預言に関して隠された事柄に長けた者たちとなるのである。4) しかるに聖なる事どもを犬どもに、すなわち獣が残り留まる限りにおいて、分かち与えるのは禁止されている（マタイ7,6）。というのも、活ける水、神的にして浄らかな流水を前にして、嫉妬深い人々、無秩序な人々、不信仰な品性の持ち主たち、探究の際に吼え、恥を知らぬような者たちと交じり合うのは適切ではないからである。8.1) <あなたの泉から外には、その水を溢れ出させるな。あなたの水は、あなたの園に流れ出させるがよい>（箴言5,16）。<というのも多くの者はそのようなことは考えもしないし、どのような人々と出会うかなど、考え

も知りもしない。ただそれは、自分の心に映るまでだ> (ヘラクイトス, 断片 5) とは、正真のヘラクイトスの言である。2) いったい、この言葉は信じない者どもをも非難しているようには思えないだろうか。<わが正しき人は、信仰によって生きるだろう> (ハバク 2,4) と預言者は述べている。また別の預言者はこう言っている。<もし信じなければ、理解しないだろう> (イザヤ 7,9)。3) どうして、このような事柄に関する超自然的な観想を、その内部で学びをめぐり不信仰が闘争しているような靈魂に、受け容れることができるだろうか。4) 信仰とは、ギリシア人は虚しく異邦人のものであると考えて拒絶するものだが、自発的な把握であり、敬神の受諾である。神の使徒によれば<望んでいる事柄の確信、目にしていない事柄の確認である> (ヘブライ 11,1)。<古の人々は、この信仰によって、とりわけ神に認められた>。信仰なくしては、神に喜ばれることは不可能なのである。9.1) だがまたある者は、信とは、明確ならざる事柄を思惟的に同意することだと定義する (cf. フロイト I 91)。ちょうど、確証とは、認識されていない事柄を明確なかたちで同意することだということと同様である。2) かくして、自由意志 (proairesis) とは、ある事物に対する希求的な性格を持つものであるがゆえに、いま思惟的な希求であるとしよう。すると、自由意志とは行為の端緒であり、信は行為の端緒、すなわち内的自由意志の礎石と見なされる。なぜなら何物かが彼に、信を通じて確証を予め示すからである。3) 生じる事柄に対して意図的に追随すること、それが理解の端緒である。実に、煩わされることのない選択は、覚知に向けての大きな重要性を提供する。また信仰への配慮は、確固たる礎石に支えられた知識となる。4) 実に、哲学の徒たちは、知識のことを、言論による躡くことのない状態と規定している。その師がただ御言葉だけであるような敬神の念に関して、他にそのような真の状態がありうるだろうか。わたしは、ないと思う。5) 一方テオフラストスは、感覚とは信の端緒であると述べている (断片 13)。なぜなら感覚から始まって、諸々の端緒はわれわれの内なるロゴスへ、そして思惟へと波及するからである。6) であるから神の書に信を置く者は、確固たる判断基準を有し、その諸書を賜った神の声を、抗い得ない確証として受け取る。かくして信は、確証によりもはや固められる必要のないものとなる。<見ずして信ずる者は幸いである> (ヨハネ 20,29)。7) 実に、セイレネスによる誘いも (ホロス『オゲュッセイ』 12.184 以下) 人間を超えた力を示すものであり、それに遭遇する者たちを、語られる事柄を受け容れるようにと、本人の意思とはほとんど関係なく魅惑するのである。

### Ⅲ. バシレイデスやウァレンティノスの体系では、 信仰は自由意志でも随意でもないこと。

10.1) ここから、バシレイデスに付き随う者たちは、信仰とは本性的なものだと考え、それは彼らが、信仰を選択の問題に帰していることから察せられる。彼らは学びを、証明不可能なかたちで、思惟的把握によって見出すのである。2) これに対してワレンティノス派の人々は、信仰をわれわれのように単純な人間どもに配し、自分たちには覚知をあてがっている。それは、彼らが本性的に救われた者たちであり、異なった胤への貪欲に基づいて生存しようと望み、霊的な存在が魂的な存在と異なっているように、信仰においてははるかに離脱しているからだ、と言うことによる。3) さらにバシレイデス派の人々は、信仰とは各々の時期にならった固有の選びであると言う。この世を超えた選びの結果として、この世的な信仰は、あらゆる本性に付き随い、各々の希望には、信仰の賜物もまた似つかわしい、と言うのである。11.1) 従って信仰は、たとえ本性の徳であるにせよ、自由意志の確立ということでは決してない。また信じない者は正当な返礼に対してその理由がないので、その返礼に値しない。また信じる者もその理由ではない。しかるに信仰と不信仰との特性と差異はすべて、正しく考察してみるならば、賞賛にも非難にも当てはまらない。それは、万物に関して能力を持つ方の本性的な必然性を、先立つものとして有する。われわれが靈魂を欠く者のように引き寄せられるために、本性的な働きにより、随意的なものと不随意的なものを、それらを先立って導く衝動が引き寄せるのである。2) わたしとしては、衝動的な部分が、外的な原因によって動かされて必然性を獲得するような、こういった生ける実体は思いつくことができない。いったい、不信仰者の回心、それによって罪の赦しを与えられるような回心が、この体系ではどこに考えられうるだろうか。洗礼も祝福されたものではなく、徴も至福なるものではなく、子も父もそうではないことになる。ただ、思うに神のみが、彼らにとって自然の分配者として見出されるものの、それは救いの礎石をも、自ずからなる信仰をも有するものではないことになる。

### Ⅳ. 信の行為の伴わない知識も技術も存在しないこと。

12.1) しかるにわれわれは、主から、自主的な選択と回避とが人間に委ねられているということを聖書を通じて受け容れ、躰くことのない規範として信仰

の上に立つ。そして目覚めた霊を示して、われわれが生命を選び取り、主の声を通して神を信じているということを公にする。御言葉を信じる者は、これが真理であるということを知っている。なぜなら御言葉は真理だからである。しかるに語りかける者に信を置かぬ者は、神をも信じていないのである。2) <信仰によって、われわれはこの世界が神の言葉によって据えられたということ、そして目に見えるものが目に見えるものから成ったのではないということを知っている> (ハブライ 11,3 以下)。使徒は言っている。<信仰によって、アベルはカインよりも優れた生贄をささげ、その信仰によって、アベルは正しい者であることを証しされた。神が、自らにささげられた生贄を通じて証したのである。その信仰を通じて、すでに没したにもかかわらず、アベルはいまもなお語っている>以下、<はかない罪の楽しみを享受するよりも> (ハブライ 11,25) までである。かくしてこの人々を、信仰は律法以前にも義なる者とし、神の約束を受け継ぐ者として定めたのである。13.1) であるからして、なにゆえ私は、信仰に関する証言を、われらの許での歴史物語から類比してここに提示したりしようか。<ギデオンの、バラク、サムソン、エフタ、ダビデ、サムエルおよび預言者たちについてわたくしが語るとするならば、何時間あっても足りないであろう> (ハブライ 11,32) およびその続きを参照されたい。2) 真理がそのうちに見られるものには、4つがあり、それは感覚、理性、知識、把握である。本性的に第一に来るのは理性である。だがわれわれにとって、またわれわれに対してやってくるのは感覚である。一方、感覚と理性から知識の実体が成立し、理性と感覚に共通なのが明証性である。3) しかしながら感覚は知識への踏み台であり、一方信仰は感覚を通じて導きながら、把握をあとに遺す。そして偽りのなさへと邁進しつつ、真理のうちに留まる。4) もし誰かが、知識とは言論をともなって指示的となる、と言うとすれば、端緒もまた受け容れがたい、ということを知ることがよい。というのも、覚知者は技芸によるのでも、賢慮によるのでもないからである。それは、別様であると受け取られる事物に関わる話であり、あるものは単に制作的であり、またあるものは観照的なのである。14.1) であるから万物の起源には、ただ信仰のみによって到達することが可能なのである。すべての知識は教えられうる。これは、先立って知っているものから教えられうるのである。2) しかるに万物の起源はギリシア人たちには知られていなかった。このことは、水を万物の原因として知っていたタレスにおいても、彼に続く他の自然学者たちにおいてもそうであった。アナクサゴラスは初めて「理性」を諸事物の上に立てたが、この彼も創造的な原因とい



うものを見抜くことはできなかった。理性の無為、無理解に対しては、何か思惟されえない渦のようなものを描いて見せたに過ぎない。3) それゆえ御言葉はこう言っている。〈あなた方は自分たちにとって、地上に「師」がいるなどと言ってはならない〉（マタイ23,9）。というのも知識とは、実証的な状態であるのに対して、信仰と恩寵とは、指示されぬものから普遍的な単純さへと前進させるからである。その単純さとは、質料とともにあるのでも、質料そのものでも、また質料によってあるのでもない。15.1) しかるに見たところ、不信仰な者たちは〈天と、目に見えぬものからすべてを大地に引きずり下ろし、両手で不器用に岩や木々を抱きかかえる〉（プラトン『ソフィスト』246AB）とはプラトンの弁である。〈というのも彼らはそのようなものすべてを手でつかみ、なにか攻撃や把握を提供するのはそれだけしかないと断言し、同じものを身体かつ本質だと定義するのだ〉。2) 〈だが彼らに対して異議を唱える者たちは、実に敬虔に、天上の目に見えぬものから何らか守られて、思惟されるもの・非実体的な形相を真なる本質だと激しく主張する〉。3) 〈見よ〉、聖書は語っている、〈わたしは新しいものを作る。それは眼が見たこともなく、耳が聞いたこともなく、人の心に浮かんだこともないものだ〉（イザヤ43,19）。新たな目で、新たな耳で、新たな心で、見えるもの・聞こえるもの、そして捉えられうる限りのものを、信仰と理解によって、主の弟子たちは語り、聞き、実行するのである。4) というのも、高価な貨幣やそれ以外の贋金、それは素人をまったくもって欺くのであるが、両替商たちをだますことはできない。彼らは偽造通貨と真正銘の通貨を分かち、判別する術を学んで知っているからである。こうして両替商は、素人に対して、これだけが貨幣であること、何が贋金であるかということを告げる。しかるにそれがどんな具合であるのかは、ただ真正銘の両替商、それに鍛錬するものだけが学び知っている。5) アリストテレスは、知識に付随する判断を、ある真実なるものとして、信仰であると呼んでいる。信仰とは知識よりも主たるものであり、信仰は知識の規準なのである。

16.1) さて、推量は弱き判断であって、信仰に対して応答をする。ちょうど追従者が友人に、狼が犬に応答するようなものである。われわれは、大工が何かを学んで技術者となり、船乗りが技術の教育を受けて舵を取れるようになるのを見て知っている。だが美しくまた善くなろうと望むことが、そうなることにとって十分であるとは考えられず、信じて学ぶことこそ不可欠なのである。2) われわれが「師」と呼んでやまないロゴス、その方そのものに従うこと、これこそ信じるということであり、そこにいかなる反発もあってはならない。神に

逆らって立つことなど、どうして可能でありえようか。覚知は信仰に基づく一方、信仰は覚知により、神への聴従 (akolouthia) と相互連関 (anthakoloutia) に基づいて成立する。3) 実に、かのエピクロスは、とりわけ真理の快楽を尊んでやまない人物であるが、彼は、信仰とは想念の「先立つ把握」であると考えている。ここで「先立つ把握」を、彼は何か明瞭な事柄、事物の明瞭な想念に向けた把握であると定義づけているのである。何事をも、前もっての把握なくしては、探究することも、問題提起することも、思案することも、ましてや吟味することもできない。17,1) どうして、求めているものに関する先立つ把握なくして、探しているものについて学び知ることができようか。把握を学んだ者はすでに、先立つ把握をなしているのだ。2) だがもし、学ぶ者が、語られる事柄を受容しうる先立つ把握なくして学べないのであれば、彼は真理を聞き取る耳を持っているのだ。「聞く者の耳に語りかける者は幸いである」(シラ 25,9)。もちろん、従順に恵まれている者も幸いである。3) だが、聞き取るとは理解することである。もし、信仰とは語られる事柄に関しての思惟による先立つ把握に他ならず、それが従順また理解、説得と呼ばれるのであれば、人は信仰なくしては決して学ぶことはできない。先立つ把握なくしては不可能なのであるから。4) これが真実であることは、何にもましてかの預言者の言葉が良く示している。〈信じなければ、理解できないだろう〉(イザヤ7,9)。この表現に関しては、エフェソスの人ヘラクレイトスもまた、敷衍してこう述べている。〈望み得ない事柄を希望することなくしては、見出し得まい。それは探しても見当たらず、不可能なものなのだから〉(ヘラクレイトス、断片 18 デールス)。18,1) だがそればかりでなく、哲学者のプラトンもまた、『法律』篇においてこう述べている。〈恵まれて幸福になりたいと思う者は、初めから直ちに、真理を分かち持つ者であることが不可欠である。それは、できるかぎり多くの時間を、真実な者として生き抜くためである。そのような人間は信頼できるからである。しかるに信頼に足らぬ人間とは、自ずからなる虚偽と親しい者のことである。心ならずも嘘をつくという者は、理性に欠けているのである。このどちらも、望ましいものではない。すべて、信頼するに値せず無学な者は、友人に欠ける〉(プラトン『法律』730C)。3) そしてそのような知恵を「王的」であると、彼は『エウテュデモス』篇においてひそやかに述べているのではないか(プラトン『エウテュデモス』291D)。また実に『政治家』において、およそ次のように述べている。〈真の王の知識は王的であり、その知識を獲得した者なら、たとえそれが執政官であろうと一市井人であろうと、その術知そのもののゆえに、王的であると

いう呼び名が与えられて当然である> (プラトン『政治家』259AB). 3) それならば、キリストに信を置く者たちは「キリスト教徒」でありかつそのように呼ばれる。それは王（であること）のために配慮を怠らない人々こそ、真に王的であると呼ばれるのと同様である。つまり、<知者とはその知恵のゆえに知者なのであり、法律家は、法のゆえに法律家なのである> (プラトン『ミヌ』314C) のと同様に、キリスト教徒たちは、キリストを王として戴くがゆえに、キリストを王として王的なのである。4) さらに少しく後に、彼はこう付言する。<真っ直ぐなことは法に適い、法とは、本性的に真っ直ぐな言葉であろう。それは文字のうちにも、他のものにも宿るものではない> (プラトン『ミヌ』317BC)。またエレアの客人も、王的で政治家である人間を「生きた法」と明言している。19.1) そのような人は、法を満たし、<父の意向を実行する者> (マタイ21,31) と記されている人であって、何か高い木の上にあって、見上げることのできる人々にとって神的な徳の規範となる人物である。2) ギリシア人たちは、スパルタの監督官のスキュタレーというのを知っていた(トクティデウス『戦史』1.131ほか)。これは木の棒の上に法が書き記されているものである。しかるにわたしの法とは、先に述べたように、王的であり靈的でもあって、正しき言葉なのである。

「法は万人の王、  
死すべき者にも、不死なる者にも」

(ピンダロス、断片169；『ストロマテイス』1,29,181,4をも参照)。

と、ボイオティアの人ピンダロスが歌っているとおりである。3) というのもスペウシッポスは『クレオフォンに宛てて』という作品の中で最初に、プラトンに考えられているのと同様の事柄を、次のような表現で記している。<もし王国というものが真摯なるもので、知者が王と為政者だけであったなら、法こそが、正しく真摯なる言葉なのだ>。実にそのとおりである。4) ストア派の哲学者たちも、これに従う形で教説化して言うには「自分たちは、王職、神官職、預言職、立法職、富、真なる美、生まれのよさ、自由を、ただ知者にのみ賦与する」という。これは非常に見出しがたいものであり、彼らに同意せざるを得ない。

## V. 信仰は知の源泉であり、富であり、自由であること。 信仰は徳の母であること。

20.1) かくして、これまでに述べられた事柄はすべて、偉大なるモーセによってギリシア人に教説として伝えられたものだと考えられる。すべてが知者の教えであるということ、モーセは次の言葉を通じて教えている。〈神がわたしを憐れんだので、わたしにはすべてがある〉(創世 33,11)。2) しかるに彼が神に愛されているということ、次のように述べて告げている。〈アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神〉(出エジプト 3,16)。というのも彼が「愛された」という名で呼ばれることはすぐにわかる。しかるに「神を見た」と名を変えて語られている。イサクについてもまた、聖化された生贄として比喩的に語ることで、われわれにとっての救いの経綸の予型として自ら選んでいるのである。3) ギリシア人の間でも、ミノスはくゼウスの旧友で、九歳にして王〉(ホメロス『オデュッセイア』 19,179)と歌われており、人々は彼に耳を傾けたのである。ちょうど神がモーセと語りあうときにはくあたかも誰かが、自らの友に語らうかのよう〉(『出エジプト』 33,11)であったと言われているように。21.1) かくして、モーセは知者であり、王であり、律法家であった。われわれの救い主は、人間的本性のすべてにおいて抜きん出ておられる。真なる美を憧れ求めるわれわれにとってみれば、ただ愛されることだけで美しい。なぜならく主は真なる光であった〉(ヨハネ 1,9) からである。2) しかるにく王〉という呼び名は、まだ経験に乏しい子供たちや、不信心にしてよく知らないユダヤ人たちによって用いられる呼ばれ方であり、預言者たちにおいて指し示される方を示す。3) しかるにこの方は非常に富んでいるので、大地のすべて、地上のもの、地下の金をも凌駕し、あらゆる栄誉をも伴って、彼には対立するものまで与えられてしまう。4) なにゆえ、ひとり、神の仕えに通じ、く平和の王なるメルキゼデク〉(ヘブライ 7,2) なる方、人間の種族のうち万物を統べるに最も適した方が、「唯一なる大祭司」と呼ばれる必要があるだろうか。5) しかるに律法家とは、いわば預言者たちの口のなかに法を与え、為されるべき事柄、明らかならざる事柄を命じ教える人物のことである。22.1) ならば、その父は唯一神だけであるというこの方よりも、高貴な方が誰かあるうか。では、この教説に属するプラトンを提示することにしよう。く親愛なるパンよ、並びに、この土地に住みたもう限りの他の神々よ、このわたしを、内なる心において美しい者と為したまえ。そして、わたしが持っているすべての外面的なものが、この内な

るものと調和せんことを。わたしが、知恵ある人をこそ富める者と考える人間とならんことを> (プラトン『ファイドロス』279BC)。2) 一方、アテナイからの客人は、<大変な金持ちが、同時に善き人であるということは不可能である。少なくとも多くの人々が、金持ちだとしている人々の場合はそうである。彼らが金持ちだというのは、莫大な額にのぼる財産を所有している、ごく少数の人々のことで、これこそまさに、悪しき人が所有するであろうものなのである> (プラトン『法律』742E)。3) ソロモンはこう言っている。<不信仰な者は、一オボロスも所有しない> (箴言17,6a)。しかるに、むしろ次のように端的に述べている聖書を信用せねばなるまい。<らくだが針の穴を> (ルカ18,25) 通り抜けるほうが、富める者が哲学するよりも容易である。4) こうして聖書は貧しき者を幸いなる者としているのであるが、それはプラトンもよく理解していて、次のように述べている。<貧困は、財産の少なさではなく、むしろあくなき強欲の高まりと受け取るべきである> (プラトン『法律』736E)。というのも、財産の少なさではなく、あくなき強欲こそ、それを振り払った者が善き人、富める人となるものだろうからである。5) 一方プラトンは『アルキビアデス』篇において、悪のことを「奴隷に相応しきもの」、徳のことを「自由人に相応しきもの」と呼んでいる (プラトン『アルキビアデス』編第1, 135C)。主は述べる。<あなた方から重いくびきを取り去り、易しくびきを担うがよい> (マタイ11,29以下)。ちょうど詩人たちが、「くびき」のことを「奴隷の」(アイスキュロス『テバイ攻めの7将』75) と呼んでいるのと同様である。そして<あなた方は、自分の罪に売り渡されている> (ロマ7,14) という言葉は、上掲の趣旨と合致する。<すべて、罪を犯す者は奴隷である。奴隷は、その家に永遠に留まることはない。もし子があなた方を自由にするのであれば、あなた方は自由であろう。そして真理があなた方を自由にするであろう> (ヨハネ8,34 - 36; 8,32)。7) アテナイの客人は次のように、知者が美しいということを述べている。<正しい人々は、たとえ肉体的に醜悪であっても、その品性がきわめて正しい者であるなら、まさにその点で、まったく立派な人であると断言する人がいても、そのように言う人が誤った判断をしているのではないかとは誰も言わないであろう> (プラトン『法律』859DE)。8) また預言は<彼の顔は、すべての人の子らの間で見棄てられていた> (イザヤ53,3) と述べている。プラトンは『政治家』の中で、知者のことを王と呼んでいるが (259AB)、その本文については上掲した (2.4.18.2)。

23.1) これらの事どもが立証されたので、あらためて信仰に関する論述に移りたい。実に、あらゆる実証性をもって、かのプラトンが、信仰の必要性をい

たるところで提示している。その際彼は、平和をも讃美している。＜内乱に際して、信頼に足る、心のしっかりした者となるには、徳の一切を備えずしては不可能である。戦いにおいては、足取りもしっかりと交戦し、いさぎよく死につこうとする者など、傭兵の中にすら実に大勢いる。しかもその大多数は、ごく少数の例外を別にして、向こう見ずの不正な輩であり、傲慢で、ほとんど比べるものもないような無思慮な輩である。これらの事どもが正しく言われているとすれば、すべての立法者は、多少なりとも有能である限り、最大の徳にとりわけ注目しながら法を制定するであろう＞（プラトン『法律』630BC）。3) これこそ誠実さ（*pistotēs*）であり、あらゆる機会においてわれわれが、平時にせよ戦時にせよ、その他あらゆる生活の機会において必要とすることなのである。なぜならこの徳こそ、他の徳をも統括して提供すると思われるからである。4) ＜最善のものとは、戦争でもなければ、内乱でもない。それらの手段に訴えることこそ呪われるべきである。むしろ最も強力なのは、相互の間の平和であり、友誼である＞（プラトン『法律』628C）。5) ここから、プラトンによれば、最大の祈りとは平和を維持することであり、諸徳の最大の母は、信仰なのである。24.1) かくして、おそらくソロモンにおいてもこう語られるのである。＜信深き者たちの口には知恵がある＞（『シの書』31,8）。またクセノクラテスもまた、『賢慮について』の中で、知恵を、第一の諸原因と思惟される実体に関する知識であると述べており、賢慮に二種類があり、一方は実践的、もう一方は観想的であって、この観想的な賢慮こそ、人間的な知恵であるとしている。2) それゆえ、知恵とは賢慮であるが、すべての賢慮が知恵であるとは限らない。しかるに万物の発端に関する知識とは信仰であるが、その実証ではないということはずでに示されている。3) というのも、サモスのピュタゴラスの信奉者たちが、探究している事柄の実証を求めたのに対し、＜師自身が述べた＞ことには、それは信仰であると考えられ、彼らが尋ねた事柄に対する確証のためには、ただその一言だけで十分であると答えた、ということは的外れだからである。＜真理を観照することを愛する者たちは＞、信ずるに値する師を信じまいと試みるものである。その師とは唯一なる神・救い主であって、語られた事柄の試金石をこの師の許に要求すべきである。4) しかるに＜聞く耳を持つ者は聞くがよい＞（マタイ11,15）と語られる。この人は誰であろうか。エピカルモスに語ってもらおう。

「理性は見、理性は聞き、他のものは耳が聞こえず、目が見えない」  
 (エピカルモス、断片249)。

5) ヘラクレイトスは、ある人々のことを<不信なる者どもだ>と叱責しつつ、こう述べている。<聞くすべも知らず、言い方も知らぬ者たちは>（ヘラクレイトス、断片 19）。おそらくこれは、次のソロモンから示唆を受けているのであろう。<あなたが聴くことを愛するなら、あなたは受け容れることができ、あなたの耳が垂れるなら、あなたは知恵を得るだろう>（シラ 6,33）。

## VI. 信仰と痛悔の関係。愛とグノーシス主義。

25.1) <主よ、誰がわれわれの知らせに信頼を寄せるだろうか>（イザヤ 53,1）とイザヤは言う。<なぜなら信仰とは聞くことに発し、聞くことは神の言葉を通じて行われる>（ローマ 10,17）と使徒は語っている。2) <信じたこともない方を、どうして呼び求められようか。聞いたこともない方を、どうして信じられようか。告げてくれる人もないのに、どうして聞けようか。遣わされもしないのに、どうして告げ知らせなどしようか。こう記されているとおりである。「よい知らせを告げる者の足は、なんと美しいことか」>（ローマ 10,14 以下）。3) あなたは使徒が、どのようにして信仰を、聞くことおよび使徒たちの約束を通じて、主の言葉と神の子に向けて高めているかお分かりであろうか。われわれは主の言葉が実証であるということを、どうして分からないことがあるか。4) ちょうど、鞠遊びの法にのっとって鍛錬を完遂させるためには、鞠遊びをする術が、鞠を送る者の技量によって支えられるばかりでなく、そのためにはリズムカルに鞠を受け取る者の技量にもよると同じように、教えに対する学習は、耳を傾ける者たちの信仰、および、いわば本性的なレベルでの技量が学びに加わるとき、信頼するに値するものとなる。26.1) かくして大地が肥沃であれば、種を蒔くことに対して協働する。というのも、最良の教育を施しても、その益は、学ぶ者の受容なしにはありえないし、預言にしても、聞く者たちの従順さなくしては意味がない。2) 乾いた麦わらは、燃やす力を受け容れる備えは十分であるから、容易に着火する。またカチカチいう石は、親近性から鉄を引き寄せ、ちょうど涙のように、琥珀は麦わらを引き寄せ、琥珀は糊殻を動かす。語られざるものに引き寄せられるものは、それに従うが、霊に引き寄せられるものは、原因としてではなく、協因としてである。3) さて悪の形相には二種類ある。一つは迷妄と忘却によるもの、もう一つは導く者・連れ去る者の力によるものである。神的な御言葉はすべての人々を集めるべく招いて叫ぶ。彼は、従うつもりのない者たちをもちろん知っているが、従うか否

かはわれわれにかかっているのだから、ある人々が無知を口実として持ち出すことができないように、呼びかけを正当なかたちでおこない、各々の力量に応じて要求しているのである。4) というのも望む者たちには、あわせて能力が備わっており、彼らはその力を共なる鍛錬によって増し高め、浄めたのである。しかるに、もしまだ能力がないとしても、すでに望むことはできる。望むことは靈魂の業であるが、為すことは身体なしには為しえない。5) 事物は単に目的だけから測られるべきではなく、各々の選択から測られるのである。安易に選択したのではないか、誤った事柄に関して回心したか、何に躓いたか理解したか、その後知ったことを思い合わせたか、などである。なぜなら回心は遅れた覚知であり、覚知は過ちのなさの第一歩である。したがって回心は、信仰の正しき用法だからである。27.1) つまりもし、先に抱いていた考えが間違いであったと信じないならば、再考することはないであろう。また、罪を犯した者に懲罰が与えられ、掟にしたがって生きる者に救いが与えられるということ信じなければ、やはり立場を変えることはないであろう。すでに、希望も信仰から成立するということが明らかである。2) 実に、バシレイデスの徒たちは、信仰を、その場に臨在しないことにより感覚を運動させることのない事物に対する、靈魂の状態であると定義している。しかるに希望とは、善の獲得に対する予期である。予期とは、信深きものであることが必然である。信深き者とは、信頼された事柄に対して裏切ることなく務めを全うする者である。しかるに神に関する言葉および神的な言葉、そして掟は、約束した事柄の執行に関して、われわれを信頼している。3) この彼こそ<信厚きしもべ> (マタイ 24,45) であり、主によって誉められる者である。しかるに<神とは信深き方である> (1 コリント 1,9) と使徒が述べる時、信ずるに値すると表明された人に対して、神は告げる。しかるに神の言葉が表明され、神その方が信ずるに値する方なのである。4) であるからどうして、もし信ずることが請けあうことであるならば、哲学者たちは、自分たちの許にある事柄が間違いないと考えるのであろうか。実証以前の自ずからなる同意は、仮定ではなく、むしろ何らか力ある方による同意なのである。28.1) いったい、神よりも力ある方があろうか。しかるに不信とは、反対する命題に対する弱き否定的仮定である。ちょうど疑念が、信仰に対して疑いを抱いた状態であると同様である。そして信仰とは自ずからなる仮定であり、把握の前の賢明な前理解であり、予期とは未来に関するものである。しかるに他のものに関する予期とは、不明瞭な事柄に関する憶見である。一方信頼とは、ある事柄に関する確かな判断である。2) それゆえわれわれは、



われわれが確信するとおりに、神の栄光と救いとを信じている。唯一なる神を信頼し、その神とは、われわれに対して美しく約束し、被造物を通じ、自らわれわれに好意をもって賜物とした事柄を裏切らない方であるということを知っている。3) しかるに好意とは、他者に対する、他者その人のための、善き事どもをめぐむ願いである。というのも神には、何も欠けたところがない。けれどもわれわれに対する善行と、主からの善意は止んでしまっており、それは神的な好意、善行に対する好意となっている。4) しかるに＜アブラハムは信じた。それゆえに彼は義とされた＞（ロマ4,3）。それゆえわれわれ、アブラハムの裔は、聞くことによって、自分でもまた信じなければならない。なぜならわれわれはイスラエル人であるが、それは徴によるのではなく、聞くことにより従順を示すためである。5) それゆえ神はこう語る、＜悦べ、子を産まなかった女よ、大声で叫べ、産みの苦しみをしたことのない女よ。夫を持つ女の子供よりも、砂漠の子らのほうが多い＞（イザヤ54,1）。＜あなたは民の端まで生き、あなたの子らは、父祖たちの幕屋にまで祝福される＞（イザヤ54,2の異文か）。6) しかるにもし彼女たちだけが、預言によって、われわれおよび族長たちに約束されているのであれば、二つの契約を通じて唯一なる神が示されていることになる。29.1) 使徒はより明確にこう付加する。＜あなたはイスラエルの契約を嗣業として受け継いだ＞、これは異邦人たちからの召し出しによって、の意である。御言葉であるこの夫の、子を産まぬ妻、これまでは花婿にとって不毛であった花嫁にこう言ったのである。2) ＜正しき者は信仰によって生きるであろう＞（ロマ1,17）、すなわち契約と掟に対する信仰によって、の意である。これら二つは、名と時によって、時代と進歩を通して、経綸によって与えられたものである。これら2つは効力の点では1つであり、一つは古く、一つは新しいものであり、一なる神の御子を通して統率される。3) それゆえ使徒は『ローマ人に宛てた書簡』の中でこう述べている。＜福音には、神の正義が信仰から信仰へと啓示される＞（ロマ1,17）。この信仰とは、預言から福音へと完遂される一なる救いであり、一にして同じ主によって教えられるものである。4) ＜わが子テモテよ、あなたについて以前預言されたことにしたがって、この命令を与える。その預言のうちに、美しき戦いを戦え、信仰と善き良心とをもって、ある人々はこの良心を捨て、信仰において挫折したのだ＞（1テモテ1,18以下）。すなわちこれは、神から来たる良心を、不信仰によって鈍らせてしまったとの意である。30.1) 信仰を、安直で世俗的・さらには誰でも持てるものとして、安易に捨て去ってよいわけでは決してない。というのももし、ギリシア

人たちが仮定しているように、習性というものが人間的なものであるとすれば、消え去ってしまうことだろう。しかしながら信仰というものは成長するものであり、存在しないところには存在しない。2) したがってわたしは信仰を、愛によって基礎づけられていようと恐れがその根底にあると（これは論難者たちの言っていることだが）、何か神的なものだと言いたい。それは他の世俗的な友愛によって引き裂かれることも、現存する恐れによって解体することもない。3) というのも愛は、信仰への親近性によって信じる者たちを作り上げるし、信仰は愛の座として善行を導き返すからである。また、法の訓導者とは、それによって信じられる事柄への恐れであり、恐れ自体であると信じられるからである。4) なぜならもし働きのうちに存在が示されるのであれば、働く者・存在する者ではなく来たるべき者・威嚇する者が信用され、現存するのだと信じられるが、これは、彼自身が信仰を生み出すのではなく、信仰に照らして信じられる者だと是認されるからである。31.1) かくして、不信仰からある人が信ある者となり、希望と恐れを信ずるようになるというのは、非常に大きな変化であり、神的なものである。実に、救いに向けての最初の傾きは信仰としてわれわれに立ち現れ、その後、恐れと希望と回心が、克己と堪忍を伴って進歩を遂げ、われわれを愛と覚知に向けて導くのである。2) したがって、使徒のバルナバが次のように言っているのはいとも相応しい。〈わたしが受けたものから、その一部をわずかばかり、あなた方に送ろうとわたしは努めた。それはあなた方がその信仰とともに、覚知を得るためである。われわれの信仰にとって恐れと堪忍は協働者であり、寛厚と克己とはわれわれの共闘者である。であるから〉、彼は言う、〈主の許に淨らかに留まるもの、すなわち知恵、理解、知識、覚知は彼らとともに悦ぶのである〉（『バルナバの書簡』15:2,2以下）。3) 実に、上述の諸徳は覚知にとっての諸要因であるが、信仰はこれらよりもさらに基礎的な要因であるということになる。したがって信仰は覚智者にとって必須であり、それは、この世に生きる者にとって、生存するためには呼吸することが必須なのと同様である。そして四要素なくしては生存することができないと同様に、信仰なくしては覚智も伴い得ないのである。実に、信仰とは真理の礎石なのである。

## Ⅶ. 神に対する恐れが正しいものであること。

32.1) しかるに、恐れを非難するものは、律法をこき下ろすことになる。そ

してもし律法をけなすのであれば、神の律法を与えた人物をもけなすのは明らかである。というのもこの件に関して、必然的に三つのものが関わることになる。まず統括者、それに統括、そして統括されるものである。2) もし前提として法を選び取るのであれば、情欲に動かされる者、快樂を喜びとなす者は誰でも、必然的に、美しくある者を無視し、神的なものを軽蔑し、不敬に走ると同時に、恐れを知らずに真理から離反することで不正を犯すことになる。3) 実に、クリュシッポスは言っている、「恐れは、非理性的な回避であり情動である」と。あなたはどうか。いったい、このような定義はどのように救い取られ得るだろうか。御言葉を通じて掟が与えられているのだから掟は禁じ、そのように立法化されることを受け入れる人々の教育を通して、恐れを支えるのである。4) であるから恐れは非理性的なものではなく、理性的である。＜殺してはならない、姦淫してはならない、盗んではならない、偽証してはならない＞（出エジプト20,13-16）と勧告する者が、どうして理性的でないことがあるのか。だがもし、言葉遣いに関して詮索を極めるのであれば、哲学者たちは律法に対する恐れを敬神の念と呼び、理性的な忌避と呼ぶがよい。33.1) ファセリスのクリトラオスは、これらの者たちを、そのあり方からではなく「名辞論者」と呼んでいる。掟は、われわれを非難する者たちにはすでに、気が利いていて大変美しいものと映っていた。名辞の交換（enallage）で考えられていたためである。2) かくして敬神の念は、攻撃する者に対する拒否であるとして、論理的であることが明らかにされる。この拒否により、前に罪を犯している者たちの回心が生まれるというわけである。＜主に対する恐れは知恵の始まり、恐れを抱く者すべてには優れた理解が生まれる＞（箴言1,7）。聖書は、知恵の形成のことを述べているのであり、その形成は神への恐れで、知恵に導くものだというのである。3) だがもし法が恐れを産み出すものであるならば、法の覚知は知恵の始まりであり、法なくしては知者はいないということになる。かくして法を拒む者は知恵なき者たちであり、法には、彼らを無神論者だとする判断がともなう。しかるに教養は知恵の始まりである。聖書は述べている。＜知恵と教養を、不敬なる者どもは無とするであろう＞（箴言1,7）。

34.1) では律法は、どのような恐れを告げているかを見とめることにしよう。徳と悪徳の間の事柄、たとえば貧困、病気、不名誉、生まれの卑しさ、およびこれらと同類の事柄があるとしよう。これらについては、ポリスごとの法が拡充して称揚しているところのものである。またペリパトス派の人々は善のうちにも3つの種類を導入し、それらの逆であるものを悪だと考えているが、彼らと

この考え方は一致する。2) しかるにわれわれに与えられた法は、真に悪であるものを避けるように規定している。それらとは、姦淫、放埒、少年愛、無知、不正、靈魂の病、死、肉体から靈魂を解き放たず靈魂を真理から解き放つものである。というのもこれらの諸悪、およびそれらから発する力は、真に恐ろしく恐怖をもたらすものだからである。3) <翼あるものに不正に網を張ってはならない> (箴言 1,17 以下) と神的な託宣は述べている。<彼らは血に与かり、自分たちにとっての悪を蓄え込んでいるのだから>。4) であるから、<律法を通じて罪の意識が生じた> (ロ-7,3,20) と使徒が語っていると大声で呼ばわっている異端の者たちにとって、律法がどうしてなお善いものでないことがあろうか。彼らに対してわれわれは次のように言おう。律法は罪を造るのではなく、単に示しただけだ、と。なぜなら律法は、為すべきことがらを規定し、為すべきでない事柄に反駁しているだけだからである。5) 救いに資する事柄を教え、罨となる事柄を指摘して、前者を用いるように勧告し、後者を避けるように命じるのは善に属することがらである。35.1) すなわち使徒のことを彼らは理解していないのである。使徒は、律法を通じて罪の意識が明らかにされたと言っているのであって、罪の実体を取り込んだと言っているのではない。2) 教育者としての律法、すなわち<キリストに向けての訓導者> (ガラテヤ 3,24) である律法が、どうして善いものでないことがあろうか。律法が与えられたのは、恐れにより、キリストを通じての完成に向けてわれわれが教育的に正され、向きを転換するためではないだろうか。3) 神は言っている。<わたしは罪人の死ではなく、その回心をこそ望む> (イゼキエル 33,11)。しかるに掟は回心を生み、為すべきでない事柄を阻止し、善行の数々を告知するものである。4) 思うに、死とは、無知のことを言っているのであろう。また<主に近き者は鞭打ちに満ちている> (イデイト 8,27)。「近づく者」とは明らかに、覚知に敢えて近づく者として、恐れ、悲しみ、迫害を、真理への渴望ゆえに甘んじて受ける者のことを指している。<教えを受けた子は知者となって去って行く。思索に満ちた子は波から救われる。だが思索の子は掟を受け容れる> (箴言 10,4a.5.8)。5) また使徒のバルナバも<自分たちの許で理解ある者たち、彼らの前に知識ある者たちは呪われよ>と言ひ、加えてこう命じている。<われわれは靈的な者となるように努めよう。神に捧げられた完全な神殿となるべく。われわれに可能な限りにおいて、神に対する恐れに心を配り、神の掟を守るべく苦闘しよう。神の義のうちに、われわれが悦ぶことができるように> (『バルナバの書簡』 4,11)<sup>1</sup>。このうちに<知恵の初めは神への恐れ>ということが神的に語られている。

## VIII. バシレイデスとヴァレンティノスの見解.

36.1) ここからバシレイデス派の人々は、この言葉を解釈して言うには、為政者自身が、仕える霊の発言を聞きつけ、この声と光景とに驚きをなし、望みを告げられて、彼の驚愕が恐れと呼ばれるとし、さらに選択的・判別的・完遂的・復興的知恵の端緒であるとした。というのも世のみならず、忖びをも判断して彼は万人に遣わしたのであるから。2) ヴァレンティノスもまた、このようなことを考えているように思われる。それはある書簡の中で次のような言辞を記していることから判る。〈あたかも、かの像に対して、天使たちが像よりも大なる事柄を、そのうちにある目に見えぬ上なる実体の種を通して呼ばわり、語ろうとするときに、彼らに恐れが取り付いたのと同じように、世の人間の末裔にあっては、恐れが、人間の業として為す人々に生じる。たとえば彫像とか、模像とか、神の名において人の手が作るものすべてにである。というのも「人」という名において創造されたアダムは先人の恐れを提供したが、この恐れは彼のうちに存在するものであり、彼が作り上げられるや直ちにその業を明らかにしたのである〉。

37.1) 後に明らかにされるように、端緒は一つであり、これらの人々がつぶやきとさえずりを作り上げているように思われる。2) しかるに律法と預言者とで前教育を受けていることは、主を通して神に益すると思われるために、〈主への恐れは知恵の初め〉と言われ、主からモーセを通して、不従順な者たち・心の頑なな者たちにその恐れが与えられたのである。というのも御言葉は彼らを選ぶことはなく、恐れがこの者たちを馴らすのである。3) 天上よりこのことを先見していた教育的ロゴスは、方法を変え、本格的に敬神の念に向けて清めを行い、器官を準備した。4) 慣れない幻影より生ずる、あるいは予期していなかった幻影による驚愕は恐れとなり、これでも告知できるが、恐怖は、生じたことないし現にあることとして、驚愕を凌駕するものである。5) であるから、驚愕をもって情動のこもった事柄を行うような者たちは、最も偉大にして彼らの許で讃歌を挙げられるような神、驚愕より以前には知られざるままに置かれるような神を見ることがないのである。6) 無知はまず驚愕に先立ち、驚愕と恐れとは神に対する知恵の初まりとなるが、神および全宇宙創造に関する知恵ばかりでなく、その選びの復興に関しても、無知が原因となって先立つ場合がありうる。38.1) では無知は、美・醜悪、そのどちらに属するのであろう

か。もし美に属すなら、驚愕によって何が止むのであろうか。ならばしもべは彼らのために、告知と洗礼を引き寄せるであろう。ではもし醜悪に属すなら、どうして悪が諸々の美の原因となるのだろうか。2) というのももし無知が先立つのでなかったなら、しもべがやって来ることもなかっただろうし、驚愕が支配者を捉えることもなかっただろう。彼らが言うように、知恵の端緒を恐れから得て、選択またこの世的なものの選抜に向かうこともありえなかっただろう。3) だがもし、先在の「原人」に対する恐れが、天上なる実体の目に見えない種子が作品のうちに備え込まれているという理由で、天使たちをして自らの創造を裏切る存在にしたとしよう。その理由は、①彼らが、根拠のない推測によって妬みを抱いていた（天使たちが、信頼の上に一任されていた創造の業について、まるで嬰兒のようにまったく無知に定められていた、というのは信じ難い）。4) あるいは②先見に囚われそれに突き動かされた。だが、彼らが予め知っていた目的に反して用いるような企てをするはずはない。またもし彼らがその先見によって、天上的な種を認識していたのであれば、自らの業に揺らぐこともなかったであろう。5) 最後には、③彼らが「覚知」に信を置きこの蛮行に及んだ。だが「充溢」のうちにあり、さらには「似像」（創世1,26）のうちに作られた人に対して企てをするとは、何と奇異なことであるかを彼らが知ったなら、これはそれ自体としてあり得ない。そのうちに原型と、他の覚知とともに不滅性が取り込まれているのであるから。

39.1) これらの者ども、そして他の者ども、とりわけ耳を貸そうとしないマルキオンの徒らに対して、聖書はこう叫んでいる。〈わたしに聞き従う人は平和のうちに確信を得て休らいを得、あらゆる災悪に恐れを抱くことなく平穩に過ごす〉（箴言1,33）。2) では彼らは法が何であることを望んでいるのだろうか。悪であるとは言わず、正しきもの、正しき者の善であると規定するのである。3) ところが主は、悪を恐れよと命じ、悪に対して悪をもって報いず、逆をもって敵を滅ぼされた。しかるに善の逆は悪であり、それは不正の逆が正義であるのと同様である。4) したがってもし、諸悪のつつしみが、主に対する恐れが為すところの恐れのないさである之主が言われるのであれば、恐れとは善であり、法に由来する恐れも、正しいばかりでなく、悪を滅ぼす善である。恐れをもって恐れのないさを導き出す者は、情動をもって無情動を導くのではなく、教養をもって情動の制御を産み出す。5) したがってもしわれわれが〈主を尊び、力を得よ。主以外の他の者を恐れてはならない〉（箴言7,1a）ということを知るのであれば、恐れることは過つことであり、神によって与えられた掟に従うこ

とは、神に対する崇敬であるということを受け容れることになる。神に対する恐れは畏怖だからである。40.1) しかるにもし恐れが情動でもあるなら、これはある人々が望んでいることであるが、恐れが情動であるにしても、すべての恐れが情動であるとは限らない。実に、迷信は情動であり、情動的なまた感情的な奇霊への恐れである。2) したがって逆に、無情動なる神に対する恐れは無情動である。なぜなら人は神を恐れるのではなく、神から離反することを恐れるのだからである。しかるにこれを恐れる者は、諸悪に陥ることを恐れ、諸悪を恐れるのである。墜落を恐れる者は自らが非腐敗性をもち無情動であることを望んでいるのである。3) <賢者は恐れて悪から遠ざかり、愚者は信じて悪と交わる>（箴言 14,16）と聖書は語っている。また<主への恐れのうち力への希望がある>（箴言 14,26）とも言われる。

#### Ⅹ. 諸徳は互いに関連し、すべては信仰に関連していること。

41.1) さて、そのような恐れは、回心へまた希望へと導く。しかるに希望とは善きものを期待することであり、それは現存しない善を求める喜ばしき思いである。もちろん、よき性向は希望へと取り込まれ、その希望は愛へと導くことをわれわれは学び知っている。2) しかるに愛とは、言論と生活とあり方に関する、あるいは概括するならば、生活共同体、友愛への希求、友人の用い方をめぐる正しき理を伴う愛情への希求、といった事どもに関する同意である。しかるに仲間とは、もう一人の自分である。これと同じ論理において、われわれは同一の理のもとに生れ落ちた人々を兄弟と呼んでいる。3) しかるにもてなしは、愛に隣り合う。もてなしとは、客人の用い方をめぐる一種の術智である。この際客人とは、この世的なものが異質であるところの人である。4) というのも「この世的な人々」とわれわれが呼ぶのは、この世に対して希望の目を向けている人々で、肉体的な欲情のことを指すとわれわれは聞いている。使徒は次のように語っている。<あなた方はこの世に倣ってはならない。むしろ心を新たにして変貌を遂げ、何が神の御心であるか、善・喜ばれること・完全なこととは何かを吟味できるようになりなさい>（ローマ 12,2）。5) さてもてなしの善さというものは、客人にとって有益なことに思いを向ける。しかるに客人とは異邦人であり、異邦人とは友人であり、友人とは兄弟である。6) ホメロスは言う、<愛すべき兄弟よ>（ホメロス『イリアス』4.155 ほか）。6) しかるに人間愛とは、それによって慈愛が育まれるもので、人間を愛に満ちたかたちで用いる

ことである。一方自愛とは、友人また親族を愛することに関わる一種の術智であり、愛に伴うものである。42.1) もしわれわれのうちにある真なる人間が霊的なものであるとすれば、兄弟愛とは、同じ霊を共有する者たちの間での人間愛である。しかるに愛情とは、好意ないし神愛 (agapēsis) を守ることであり、神愛とは、完全な受容であり、愛することは習慣を満足させることで、持ち来たること持ち去ることの双方である。2) しかるに同意により同一性のうちに導かれるのは、その同意が共通善の知識だからである。というのも合意とは、見解の協和だからである。3) そして使徒は言う。〈われわれにおいて、愛に偽りがあってはならない。悪を憎み、善から離れず、兄弟愛をもって互いに愛し〉以下、〈もし可能であれば、せめてあなた方は、すべての人々と平和に暮らすのが善い〉(ローマ12,9以下)。しかる後使徒は言う。〈悪に負けることなく、善をもって悪に打ち勝つがよい〉。4) この同じ使徒は、ユダヤ人たちに対しても証言することに同意する。なぜなら彼らは神に対する熱心さは有しているが、それは認識 (epignōsis) に基づくものではない。というのも彼らは、神の義を知ることなく、自分個人の益を立てることだけを求め、神の義に屈しようとはしない〉(ローマ10,2以下) からである。5) というのも彼らは法の意向を知悉し実行もしている。しかしながら彼らが受け容れた事柄、それを法が望みもしていると考えているのである。彼らは法が預言者でもあるということ信じようとはせず、ただの言葉と恐怖だけを信じ、状況や信仰に追従することをしない。〈というのも法の目的とは、正義に向かうキリストなのであり〉、この方こそは法によって、〈すべての信徒たちに〉〈預言された方であった〉。43.1) ここからモーセによって、この人たちに対してこう語られる。〈わたしは民ならぬ者をもってあなた方の妬みを引き起こし、愚かな国をもって、あなた方の怒りを燃え立たせる〉(申命32,21)。これはすなわち、従順に向けて備えのできている国、という意味である。2) またイザヤを通して、神はこう述べている。〈わたしに尋ねようとしぬ者にも、わたしは尋ね出される者となり、わたしを求めようとしぬ者にも、見出される者となった〉(イザヤ65,1)。すなわちこれは、主の来臨の前にもという意味であり、主の来臨の後には、イスラエルにも、かの預言されていた事柄が、いま固有に語られている。〈わたしはこの両の手を、不従順な民、反抗する民に対しても一日中差し伸べてきた〉(イザヤ65,1)。3) 異邦人たちからの召し出しの理由がわかるだろうか。預言者によればそれは、民の不従順と反抗だと明瞭に語られているのである。しかる後、神の善性がこれらの民にも向けられることが示される。4) 使徒はこう言っ



ている。〈彼らユダヤ人たちの躓きにより、救いが異邦人にももたらされたが、それはユダヤ人を妬ませるためであった〉（ローマ 11,11）。それは回心を起こさせたいという意味である。5) 一方『ヘルマスの牧者』は、単純に眠れる人々に関して表現を用い、異邦人たちの中にもユダヤ人たちのうちにも正しき人々を知っているという。それは主の来臨の前ばかりでなく、律法以前にも、神の前に悦ばれたことでわかるという。それはたとえばアベルであり、ノアであり、それ以外にも正しき人があったならその人である。44.1) 実に彼は、使徒たちや教師たちを、神の子の名を告げる人々として、力と信仰において、すでに先に眠ってしまった人々に告知させるべく眠るひとだと言っている。2) その後彼は付け加える。〈彼らは自ら、彼らに告知の印章を与えた。そして彼らとともに水の中に降り、再びそこから上がった。だがこれらは生きたまま降り、再び生きたまま上った人々である。しかし彼らは予め眠り死者として降り、生きた状態で上った人々である。3) それゆえ彼らは生ける者とされたために、神の子の名を認識している。それ故、彼らは彼らとともに上り、やぐらの建設に加えられ、切り出されぬまま建てあわされた者たちである<sup>2</sup>。なぜなら彼らは正義のうちに眠りに就き、大いなる清さのうちにあり、単にかの印章を有していないというだけだからである〉（『ヘルマスの牧者』9,16,5—7）。4) 異邦人で、律法を有していないものの、本性的に律法に載る事柄を行う者たちは、律法を有しないものの、自らにとって彼ら自身が律法なのである〉（ローマ 2,14）と使徒は述べている。

45.1) かくして、諸々の徳が相互の連関のうちにある（anthakolouthousi）ということについては、何を述べる必要があるだろうか。既に、信仰は回心と希望により、敬神（eulabeia）は信仰により、それらのうちなる忍耐（epimōnē）と修練（askēsis）とは、学びを伴って愛（agapē）により、そして愛は覚知（gnōsis）により画される（symperaioutai）ということは示し終えた。2) だが、ただ神的なるもののみが、本性的に智慧に満ちていると考えねばならないということも注記しておく必要がある。それゆえ智慧も、真理を教える神の力であり、覚知の完成はここに求められる。3) 愛智者（philosophos）は真理を友としかつ愛し、僕であることを終え、愛のゆえに既に真の友と見なされている。4) プラトンが『テアイテトス』編で述べているように（プラトン『テアイテトス』155D）、智慧の端緒は事物に驚くことである。またマッティアスも『伝承』の中で勧めて言うには「現実に驚嘆せよ」。これを、彼はこの世を超えた覚知の基礎に据えている。5) また『ヘブライ人による福音書』においても「驚嘆する者は王

として統治する」,そして「王として統治するものは休らいを得る」と記されている。6) 実に、無学な者は、無学な状態に留まって智慧の想念を獲得しない限り、哲学することは不可能である。哲学とは、真に存在する方への、またこの方に向けて伸びる学びへの欲求なのであるから。7) もし製作することが、ある人々によって麗しく鍛錬されたとしても、知ることは為されるべきであり実行されるべきであって、これに向けて労苦すべきでもある。これは人が神に似るためであり、ここで神と言うのは救い主のことである。その際、万物の神に、統率者のロゴスを通じて仕えるのである。このロゴスを通して、真理に基づく美と義とが看取される。敬虔とは、それに伴う実践であり、それは神に聴従することなのである。

## X. キリスト教的哲学.

46.1) 生粋の愛智者は、次の三つの事柄を固く守らねばならない。まず観想。次に掟の完遂。三番目に善き人としての形成である。これらが相伴うとき、覚知者を完成させる。これらのうち何が欠けても、覚知の業は不完全なものとなる。2) それゆえ聖書は神的な言い回しで次のように述べている。〈そして主はモーセに対し、次のように告げて言った。「イスラエルの子らに告げて言いなさい。わたしはあなたたちの神、主である。あなたたちがかつて住んでいたエジプトの国の習慣に従ってはならない。わたしがこれからあなたたちを連れて行くカナンの習慣に従ってはならない。彼らの掟に従って歩んではならない。わたしの定めを行い、わたしの法を守り、そのうちに歩め。わたしはあなたたちの神、主である。わたしの法をすべて守り、それを実行せよ。これらを行う人はそのうちに生きる。わたしはあなたたちの神、主である」〉(レビ 18,1 - 5)。47.1) したがって世であれ迷妄であれ、情動であれ邪悪さであれ、エジプトやカナンの土地は、それら避けるべきものの象徴である。一方神的でこの世的ではなく、行うべきものがどのようなものであるかに関して聖書はわれわれに示してくれている。2) 聖書が〈これを実行する者は、そのうちに生きる〉と語る際、ヘブライ人たちの矯正とその隣人であるわれわれ自身の鍛錬また進歩を、彼らまたわれわれの「生命」と呼んでいるのである。3) 〈というのも罪のうちに死んだ者となっていた人々は、キリストとともに〉、すなわちわれわれの掟とともに〈生きる〉(1コリ 2,5)。4) 聖書はしばしば〈わたしはあなたがたの神、主である〉という言葉を繰り返す。これは非常に嫌な事

柄をもって恥じ入らせる表現であり、掟を与えた神に従うことを教える表現であり、やんわりと、神を求め、どのようにすれば覚知への道に踏み出せるのか、最大の観想とは何か、観照、真の知識、ロゴスによって躓くことのなくなった知とは何か、といった事どもを思い起こさせているのである。ただこれだけが、知恵の覚知であり、義なる行為は決してここから切り離されることがないのである。

## XI. 信仰における確かさについて.

48.1) しかしながら、自惚れによる知者の〈覚知〉は、異端諸派であれ異邦人であれ、あるいはギリシア人の間の哲学者たちであれ、〈自惚れる〉（1コリント8,1）と使徒は言う。覚智が、真なる愛智によって伝えられた事柄の実証的な証明であるならば、それは知において信頼しうるものであろう。われわれは、覚知とはロゴスであり、疑わしき事どもに対して、同意された事どもから信仰を付与するものであると言うだろう。2) しかるに信仰には二種がある。その一つは実証的なもの、もう一つは憶測によるものである。何ものも、二通りの証明の名を挙げることを妨げない。一つは実証的なもの、他方は憶測によるものである。これらは各々、覚知と先覚知とされ、一方は自らの本性を正確に規定し、他方は省略的に述べるものである。3) そして、神的な書物に導かれ、使徒によれば聖なる文字と「神の教える」知恵に導かれたわれわれの証明だけが真実である、ということに他なるまい。学びとは実に、掟に従うこと、すなわち神に信を置くことなのだから。そして信仰とは言わば神の力であり、真理の活力なのである。49.1) ただちに主はこう語る。〈もしあなた方が、芥子種一粒ほどの信仰を持っていたなら、この山を移せる〉（マタイ17,20）。あるいはまた〈あなたの信ずるとおりに、あなたにそうなるように〉（マタイ9,29）。また、手当てを受ける事柄に関して、信仰によりさらに癒しを得る者がいたり、あるいは死者が、〈必ず復活する〉と信ずる者の力によって蘇ったりすることがある。2) しかるに判断的な実証というものは人間的なものであると同時に、修辭学的な弁証あるいは弁証法的な推論に向かうものである。3) というのも最高次の証明は、実証的であると仄めかしたが、聖書の提示及び学ぼうと希求する者たちの靈魂に信仰を注入する開示によるものであり、これこそ覚知であろう。4) もし探究している事柄に対して真なる言表が受け取られたならば（paralambanomena）、それは神的であり預言者的なものであろうから、その人々

には必然的に、導き出される結論として、真なるものがもたらされることになるであろう。かくしてわれわれにとっては、覚知こそまさしく実証であろう。

50.1) したがって、天上的で神的な食物を想起させるものは、黄金の壺に入れて奉納されるべきだと命じられているため、<1オメルは3メトロンの10分の1である>（出エジプト16,36）と言われる。というのもこの3メロンというのはわれわれのうちに内在するものであり、3つの規準を意味している。それは、感覚されるものに対する感覚、語られる語や句にあっては言葉、そして思惟されるものにおける理性である。2) さて、覚知者は、言葉、思い、そして感覚と働きに関わる過ちから遠ざかる。それは彼が<情欲をもって眼差しを注ぐ者はすでに姦淫を犯したのである>（マタイ5,28）という言葉を目にし、また<心において浄い者は幸いである。彼らは神を見るであろう>（マタイ5,8）という言葉をも心に留め、また<口に入るものが人を汚すのではなく、口を通してでゆくものが人を汚すのである。心から、その人の思いが出て行くからである>（マタイ15,11.18以下）という言葉をも知っているからである。3) そこで思うに、神に照らして真であり正しき規準というものは、それによって測られるべきものが測られるわけであるが、人間を束ねる10という数字であり、このことを総じて上で語られた3メロンという言葉が明らかにしているであろう。4) おそらく、肉体と靈魂、そして5つの感覚、音声的、種的、そしてどのようにでも欲するままに呼んでよいのであるが、思惟的ないし靈的、の計10ではなかろうか。51.1) いわば、他のすべての事物を凌駕して理性の上へと立つ必要がある。その際、さながらこの世にあっては、9つの運命を踏み越えるかのごとくである。すなわちまずは一つの場所にある4つの元素を同じやり方で一気に越え、しかる後7つの惑星と9番目の恒星を越え、9という数字を超えた完全な数字に向かい、10番目の運命へと、神に関する覚知へと到達する、すなわち創造行為をめがけて創造主を望むのである。2) それゆえ、いけにえのうち10分の1のエファが神に奉納され、パスカ（過ぎ越し）の祝祭は10番目から始められるが、それはあらゆる情動とあらゆる感覚的事物の過越しなのである。3) かくして覚知者は信仰に堅く立つ一方、思いなしによる知者は自ら真理を掴もうとはせず、揺らいで定まることのない衝動にさいなまれるのである。4) であるから次のように記されるのも尤もである。<カインは神の御顔から去り、エデンの前、ナイドの地に住まった>（創世4,16）。ナイドとはうねり、エデンは優美という意味に解される。5) しかるに信仰と覚知と平和は優美であり、それに注意を払わない者は追放されるが、思いなしによる知者

は神の掟の端緒に耳を傾けようともせず、独学者のごとくに、波打つうねりにおのずから消え去ってゆき、生まれざる者に関する覚知から墜落し、死すべきにして生まれる事物へと変貌し、時が変われば異なる事柄を想像する。6) <舵取りがいない者たちは、木の葉のごとくに落ちてゆく> (箴言 11,14)。理性、および躓くことなく留まる支配的にして靈魂を統御する部分、それが靈魂の舵取りと言われているのである。なぜならこの接近は、真に変化せざるものによる変化せざるものへの運動だからである。52.1) かくして<アブラハムは主の前に立ち、近づいて言った> (創世 18,22)。またモーセにはこう言われる。<あなたはここに立ち、わたしとともにあれ> (申命 5,31)。2) しかるにシモン派の人々は、彼らが崇敬する人物である「立てる方」に対し、生き方において似たものとなることを望んだ。3) かくして信仰も、真理をめぐる覚知も、常に同一性をめぐり、彼らを捉える靈魂を、同一性のうちにあるように備える。4) 変化と変貌、それに離反は、虚偽と生まれを同じくするものであり、ちょうど覚知者であって平静と安息、そして平安が生まれを同じくするのと同様である。5) したがってちょうど、虚傲と思いなしが哲学を攻撃するのと同様に、偽りの覚知は覚知を損なう。偽りの覚知は同様の言葉で呼ばれるのであるが、これについては使徒が次のように記している。<おおテモテよ、あなたに委ねられたものを守れ。世俗的な無駄話と、偽って「知識」と称している反対論とを避けよ。ある人々は、そのような「知識」を持っていると主張し、信仰の道から逸れてしまったのだ> (1テモテ 6,20 以下)。6) このような声によって非難されている異端の人々は、『テモテへの書簡』を真正と認めていない。7) したがって、もし主が<真理であり、神の知恵であり力である> (ヨハネ 14,6; 1コリント 1,24) なら、それと同様に、真なる覚知者は、その方と、その方によって父である方のことをも知るということが示されるであろう。なぜなら<正しき者の唇は、いと高き事どもを知る> (箴言 10,21) と言う方のことが併せ思い起こされるからである。

## XII. 信仰とグノーシス主義における二つの目的.

53.1) さて信仰というものは、時間と同様に2種類があり、その双方に、二つの徳が共生しているのをわれわれは見出す。というのも記憶は、時間のうちの過ぎ去った部分に属す。一方希望は、時間のうちの将来の部分に属する。しかるにわれわれが信じているのは、過去はすでに生起したことであり、一方未

来はこれから起こるということである。またわれわれは現在愛するのと同様に、過去は信仰のうちにあると信じ、未来は希望のうちを受け容れている。2) なぜなら万物を通じて、愛は一なる神を知る覚知者に赴くからである。〈すると見よ、神が創造されたものはすべて、きわめて美しかった〉(創世1,31)。彼は知悉し、かつ驚嘆する。しかるに敬神の念は、〈生涯の長さ〉を増し加え、〈主への恐れは日々を増し加える〉(箴言3,2;3,16;10,27)。3) したがって日々が漸増する生涯の一部であるのと同じように、恐れとは愛の端緒であり、増し加わるに伴って信仰となり、しかる後愛に変貌する。4) しかしながら、わたしが獣を恐れるのではなく嫌うのと同様に(恐れには二通りがある)、わたしは父親を畏怖する。父親を恐れながらも同時に愛しているからである。また、叱責されるのではないかと恐れるのであるが、自分自身を愛し、恐怖を選び取っているのである。しかるに父親を恐れながらも、彼に出会うことの方を愛する。5) かくして信心深くあり、愛と恐れとを混ぜ合わせる者は幸いである。信仰とは実に、救いへの活力であり、永遠の生命への力なのである。54.1) しかるに覚知とは預言の思惟であり、いわば、すべてを明らかに示す主によって、彼らに予め知られている事柄に関する覚知である。2) したがって予言される事柄に関する覚知は、3重の表明を示す。それはかつて起こった事柄、いま起こっている事柄、そして将来起こるであろう事柄についてのそれぞれ表明である。3) 達成された事柄にせよ、あるいは希望される事柄にせよ、その最高潮というものは、信仰の前に潰える。しかるに説得というものは、その両者の確証のために、現在の働きが提供するものである。4) というのももし、預言が一つであるにもかかわらず、あるものはすでに成就し、あるものは満たされているとすれば、そこから、希望される事柄は信頼に値し、一方過ぎ去ったことは真実であるということになるだろう。5) つまり、まず成立し、しかるのちわれわれの前に過ぎ去るのであるが、それは過ぎ去った事柄に関する信仰が過ぎ去った事柄の把握であり、これから生じる事柄への希望とは、これから起こる事柄に関する把握であるということになる。同意ということ、プラトンの徒ばかりでなくストア派の徒も、われわれに関してあると言っている。55.1) したがってすべての憶見、判断、把握、学びというものは、それらによってわれわれが常に人類とともに生き、共生しているものであるが、同意である。しかるにこの合意とは信仰に他ならないであろう。そして信仰からの離反とは不信仰に他ならず、この合意と信仰とが力を持つということ、を明らかにするものである。というのも非存在が喪失と言われることはないであろうから。2) も

し人が真実を直視するならば、人間が本性的に、虚偽に対する同意には逆らい、真実に対する信仰への端緒を有しているということを発見するであろう。3) 『ヘルマスの牧者』はこう言っている。〈信仰とは、教会を包摂する徳である。この信仰によって、神に選ばれた者たちは救われるのである。しかるに男性的にふるまうのは克己である。それらには素朴さ、知識、悪のなさ、荘厳さ、愛が伴う。これらはすべて、信仰の娘たちである〉（『ヘルマスの牧者』3,8,3—5.7）。4) またこうも言っている。〈信仰は先導し、恐れは打ち立て、完成させるのは愛である〉。〈したがって〉、彼は言う。〈打ち立てるために、主を恐れねばならない。だが、打ち倒すために悪魔を恐れるべきではない〉（7,1—4）。5) またこうも述べる。〈主の業は、すなわち掟は、愛すべきであり実行せねばならない。なぜなら神に対する恐れは教え、愛に向けて復興させるが、悪魔の業に対する恐れは、共に住む憎悪を抱くからである〉。6) しかるにこの同じ人物は、回心について、それは〈偉大なる理解である。なぜなら為した事柄に関して回心する者は、もはやそれを行ったり言ったりせず、むしろ過ちを犯した事柄をめぐる自らの靈魂を苛み、善を行うようになるであろうから〉。〈したがって、罪の赦しということには回心を伴い、その双方がわれわれに関わるものであることを示す〉（4,2,2）。

### XIII. 痛悔と責任。

56.1) したがって、罪からの赦しを得た者は、もはや罪を犯してはならない。なぜなら罪に対する最初の、そして唯一の痛悔に際して（罪というものは、異邦人的な最初の生、すなわち言わば無知における生に従っていた以前のものに属するものであろうから）、直ちに、呼ばれた者たちには回心が生じ、この回心は、靈魂の場を、そこに信仰が基礎付けられるように過ちから清めるものであるから。2) しかるに主は〈人の心を知る〉（使徒15,8）方であり、未来の事柄を予め知るばかりでなく、人間の変わりうる部分、および悪魔の倒錯した全能に見える部分をも、天上より初めから見通しておられる。悪魔は、罪の赦しに際して人間を羨み、罪のいくつかの原因を神の僕たちに負わせ、ずるく立ち回って、神の僕たちも自らとともに墮落するように仕向けるのである。57.1) かくして主は、信仰のうちにありながら、何らかの過ちに陥る人々に対してさえも、憐れみ深く、第二の回心を提供する。それは、もし人が召命の後に試みに遭ったとすれば、それは強いられた場合や欺かれた場合もあり得るのだから

ら、さらに一つの「もはや後悔しない回心」を得られるようにするためである。

2) くもしわれわれが真理の認識 (epignōsis) を受けた後にも、故意に罪を犯し続けるとすれば、もはや罪のためのいけにえは残されていない。ただ残っているのは、裁きの恐ろしき宣告と、逆らう者たちを食い尽くさんとする火の激しさであろう> (ハブライ 10,26 - 27)。

3) しかるに罪に対する連続した絶え間のない回心は、一度たりとも信じたことのない者が、罪を犯したと単に感ずるだけというのとまったく何も異なるところがない。そして彼は、これら二つのうち、すなわち分かっていて罪を犯すのと、過ちを犯した事柄に関して回心し、再び過ちを犯すのとで、どちらがより劣っているかもわかっていない。

4) というのも、そのどちらの場合であっても罪は、吟味してみれば明らかになるであろうから。罪というものは、行われる際に、その不法の為し手によって認識されるものである一方、悪しきことだと予め知っていて手がける際に行われるであろうものでもある。そしておそらく、気概と快楽を悦ばせるものであろうが、何を悦ばせることになるのか、その際に分かるものではない。しかるに喜ばせた事柄を思い返すことによって、再び快楽のうちに転び込み、その端緒を自ら誤つことに相伴うものなのである。というのも人は、回心した事柄に関して、再びそれを行うときには、何を為しているかを知りつつ、それを自ら完遂するものだからである。58.1) したがって、異邦人かつかの前生のあり方から信仰へと進み行く者は、一度で罪の赦しを得る。しかしながらその後には罪を犯し、しかる後回心するならば、たとえ赦しを得たとしても、恥じ入ることが不可欠であり、もう罪の赦しのために洗われることがないのだと自覚すべきである。

2) というのも以前に神格化していた偶像を棄て去るばかりでなく、以前の生の業をも、<血から生まれたのでも、肉の望みから生まれたのでもなく> (ヨハネ 1,13)、霊において再生を遂げた者として、棄て去らねばならないからである。

3) これは、もう決して同じ過ちに陥らないという回心に他なるまい。というのも罪を想起こすことは、しばしば回心することにもなり、鍛錬の不足から熟練へと向かう傾向に属することだからである。59.1) したがって、回心ではなく、回心の想起は、われわれがしばしば罪を犯す事柄に関してしばしば赦しを求めることである。聖書は叫んでいる。<正義は、罪のない道を真っ直ぐにする> (箴言 11,5a)。あるいはこうも語られる。<悪のない人の正義は、その人の道を真っ直ぐにする>。

2) 実に、ダビデはこう記している。<父が子らを憐れむように、主は主を恐れる者たちを憐れんだ> (詩篇 102,13)。

3) かくして<涙のうちに種蒔く者は、喜びのうちに刈り取る> (詩篇 125,5)。この喜



びとは、回心を通じての告白によるものである。〈なぜならすべて、主を恐れる者たちは幸いである〉（詩篇 127,1）。4) 福音においてこれに対応する至福がお分かりであろうか。4) こう語られる。〈人が富むとき、恐れることはない。その人の家の名誉が増し加わるときも同様である。彼が死ぬときにすべてが取り去られるわけではないし、彼の名誉も彼とともに潰えるわけではないのだから〉（詩篇 48,17 以下）。5) 〈わたしはあなたへの憐れみのうちにあなたの家に入り、あなたの聖なる神殿の前で、あなたへの恐れのうちには跪く。主よ、あなたの正義のうちに私を導きたまえ〉（詩篇 5,8 以下）。

6) したがって衝動とは、何かに向けた、ないし何かからの、思惟の動きである。しかるに情動とは、御言葉に従った規準を増幅させたり、低く設定したりする衝動であるか、あるいは公にされた衝動、または御言葉に従順ならざる衝動である。したがって、本性に反した靈魂の運動が、御言葉に対する不従順に基づくとき、諸々の情動が生ずる（われわれのうちにおける離反・恍惚・不従順がそれであり、これらはわれわれの内なる随順がそうであるのと同様である。それゆえ自発的な思いも裁きの対象となる）。かくして諸情動のそれぞれに関して、細かく検討してみるならば、それらが非理性的な性向（orexis）であることが見出されるであろう。

#### XV. 不随意的な行為に関して。

60.1) 実に、不随意的な事柄は裁かれない（これには二種があり、無知から生じたものと、不可避免的に生じるものがある）。なぜなら、不随意的なあり方で過ちを犯したと言われている事柄について、どのように裁くことができるだろうか。2) それはたとえば、狂気に陥ったクレオメネス（*Ἄροττος* 『歴史』 6.75）やアタマス（*Ἄταμος* 『変身物語』 4.516）のように、茫然自失した場合であるとか、アイスキュロスが舞台上で神秘を語り、アレイオス・パゴスで裁かれた際に、秘儀の伝授を受けていないということを明らかにして赦された場合のように、行為に関わる場合とか（*ἄκω* 28 頁）、自分が何をやっているのか知らず、敵を赦し、敵の代わりに身内の者を殺した場合、あるいはボタンのついた槍を剥ぎ取られ、ボールを失った槍で誰かを殺す者の場合、あるいはどのようにすべきかを知らずに、スタディウムで相手の剣闘士を殺してしまった者の場合、あるいは、いかなる目的とするのかを知らず、健康な者に、そうする目的でなく、生命を救う目的で解毒剤を与えて殺してしまった医者の場合がそれに

該当する。

61.1) さて律法は、自発的ではなく人を殺してしまった者（民数 35,22 – 25）をも、自分の意志ではなく精を漏出した者（レビ 15,16）の場合のように裁く。その次第は、自ら進んで行った場合と同様ではない。2) とは言うものの、もし誰か、情動を真理に及ぼすような者があれば、その人は自ら進んで行った場合と同様に処罰を受ける。というのも真に、生みの力を持つ御言葉を制御することのできない者は、それ自体が靈魂の非理性的な情動なのであるから、無駄話の毒にもほど近く、処罰されてしかるべきである。＜信篤き者は事柄を息吹のうちに潜めることを選択する＞（箴言 11,13）。したがってこれは自由意志の問題だと判定される。3) ＜主は心と神経を究められる＞（詩篇 7,10）。また＜欲望に目を注ぐ者＞と判定される。それゆえ＜欲望を抱くな＞（マタイ 5,28）と語られ、＜この民は、昏ではわたしを尊ぶが、彼らの心はわたしからは遠く離れている＞（イザヤ 29,13）と言われる。4) なぜなら神はこのような考えに目を留めておられるのである。それはたとえばロトの妻が、自分の意志でこの世の悪を振り返っただけで、神は彼女を感覚なきものとして放置したことに現れている（創世 19,26）。彼女は塩の柱として示されることになり、それ以上進めない姿で立ち尽くした。それは愚鈍で無為な像ではなく、ただ靈的に事物を見通すことのできないものとして、そこに備えられ縮まったのである。

## XV. 随意の行為と痛悔、赦しに関して。

62.1) しかるに随意的なこととは、衝動によるか、選択によるか、思惟によるもののいずれかである。これらは互いに隣接しており、それぞれ過ち・間違い・不正ということになる（コルギアス 11；アリストテレス『弁論術』1374b6；『ニコマコス倫理学』1135b12）。2) しかるに次のように述べることができよう。過ちとは、快樂主義的かつ放埒に生きること、間違いとは、友とは知らずに敵として彼を打つこと、不正とは、墓穴を掘って神聖を冒瀆すること、である。3) したがって過ちを犯すとは、何を為すべきかを判断する術を知らない、あるいはそれを為すことができないことから生起する。すなわちちょうど、ある人が穴に、知らずして、あるいは体の弱さのために踏み越えることができずに陥るような場合である。4) しかしながらわれわれにできることは、われわれの教養に追随し、掟に聴従することである。63.1) もしわれわれが、気概と欲望においてこれらに与かることを望んでおらず、それらが裏切られていることを認識していたと

しよう。この場合、われわれは過つことになろうが、むしろ、自らの靈魂に対してわれわれは不正を働くことになろう。2) かのライオス王は悲劇作品の中で、次のように述べている。

「あなたが警告された事柄の何一つとして、  
わたしが失念していたわけではないのだが、  
考えを持っていたわたしに、自然本性が強いたのだ」

(エウリピデス、『クレシポス』断片 840)。

すなわち情動にさらされる者となったという意味である。3) 一方『メデア』でも、メデア自身が同様に舞台上でこう叫んでいる。

「わたしは、自分がどんな悪事を働こうとしているか、分かっている。

わたしの意向よりも、気概のほうが勝るのだ」

(エウリピデス『メデア』1078 以下)。

4) だがアイアスも黙ってはおらず、自刃しようとして叫ぶ。このように自由闊達な男の靈魂をさいなむものとして、これほど悲痛な不名誉はない。

「わたしはこのような情動に取り付かれた。怒れるわたしを、  
災厄の深い染みが狂気の深みから苦い突き棒で苛むのだ」

(ギリシア悲劇断片集、作者不詳 110)。

64.1) これらの人々は、憤激 (thymos) がかく至らしめた場合であるが、欲望が悲劇に陥れる女性に関しては、他に多く見出される。たとえばファイドラ<sup>3</sup>、アンティア<sup>4</sup>、エリフュレ<sup>5</sup>がそうである。

「彼女 (エリフュレ) は、いとおいしい夫に代え、高価な黄金を受け取って」  
(ホロス『オデッセイア』11,327)

2) また他の芝居は、かの喜劇役者のトラソニデスをして「彼女はわたしを、卑しいはしめめとして奴隷扱いした」(マントロス、断片 338) と言わしめている。

3) さて、不運 (atychēma) は予期せぬ誤りであるが、誤りは非随意的な不正である。しかるに不正は意図的な悪である。したがって誤りは、その人の非随意的な事柄である。それゆえこう語られる。<誤りがあなたがたを支配することはない。なぜならあなた方は律法の下にいてではなく、恵みの下にいてからだ> (ロマ 6,14)。ここで使徒は信徒たちに向けて述べている。なぜなら<彼の傷によって、われわれは癒された> (イザヤ 53,5) からである。5) これに対して不幸 (atychia) とは、他人による、その人に対する非随意的な行為である。それに対して不正は、わたしのものであれ、他人のものであれ、随意的な場合

にのみ見出されるものである。

65.1) 『詩篇』の詩人は、これらの罪に関する相違点を暗示しつつ、神がその不法を拭い去り、その罪を覆った人々のことを「幸いなる者たち」と呼ぶ。彼らは、神が他の罪を数え上げず、残りの罪を赦されたのである。2) <というのもこう記されている。「その不法が取り去られた人、その罪が覆われた人は幸いである。主がその人の罪を数え上げない人は幸いである。その人の口には企みがない」(詩篇 31,1 以下)。このような至福は、神によりわれわれの主イエス・キリストを通じて選ばれた人々の上に生ずる> (1 クレムス『コリント人への書簡』 50,6 以下)。3) <なぜなら愛は多くの罪を覆うからであり> (1 ペトロ 4,8), <罪びとの死よりもその回心を選ぶ方が罪を拭い去るからである。66.1) しかるに選択 (proairesis) によらずに成立する事柄が数え入れられていない。主はこう言われる。<欲望を持った者は、すでに姦淫の罪を犯したのだ> (マタイ 5,28)。だが<光をもたらず御言葉> (ヨハネ 1,9) は罪 (hamartia) を赦す。<主は言われた。「そのとき、彼らはイスラエルの不正を探すだろう。だがそれは存在すまい。またユダの罪を探すだろう。だがそれは決して見出されまい」> (エレミヤ 27(50),20)。<なぜなら、誰か、わたしに似た者があろうか。誰が、わたしの眼前に立てようか> (エレミヤ 29,20)。3) ここでは、唯一の善き神、諸々の罪に対しそれぞれに応じて裁いたり赦したりする神が告げられていることがお分かりだろうか。4) ヨハネもまた『第一書簡』において、次のような表現で諸々の罪の相違点を教えている。<もし、自分の兄弟が、死に至ることのない罪を犯しているのを目にしたなら、神に願え。そうすれば彼に生命を与えることになるし、罪を犯している者たちは死に至ることがない> (1 ヨハネ 5,16 以下)。5) さらにこう語られる。<死に至る罪というものがある。これについては、神に願えとは言わない。すべての不正は罪であるが、死に至らない罪というものもある>。67.1) だがそればかりではなくダビデも、またダビデの前にはモーセも、3つの教説に対する覚知を次のような表現で強調している。<不敬なる者どもの謀のうちに歩まない人は幸いである> (詩篇 1,1)。不敬なる者どもは、さながら魚が、闇の中を深みへと歩み行くようなものである。というのもウロコを持たぬ者たちは (モーセはこれらに触れることを禁じている【レビ 11,10】)、海の下に住んでいる。2) <罪人らの道に立つな>。罪人らとは、ちょうど、主を恐れているように見せかけながら、実は豚のように罪を犯す者どものことである。なぜなら飢えては叫び、満たされても主人を識ることがないからである。3) <悪疫の座に座すことのない者は幸いである>。

悪疫はちょうど、猛禽類が略奪をするために常に備えているようなものである。モーセはこう勧告している。〈豚も、鷲も、鷹も、鳥も、ウロコを持っていないすべての魚も、食してはならない〉（『ハルハガの書簡』10,1）。これはバルナバの言葉である。4) わたしは、こういったことどもに関して、知恵ある者の言葉を聞く。この人は〈不敬なる人々の謀〉とは異邦人を、〈罪びとたちの道〉とはユダヤ人の仮説を、また〈悪疫の座〉とは異端諸派を指すと理解している。68.1) また別の者は、より説得力のあるかたちで次のように主張する。すなわち第一の至福は、悪しき見解、つまり神から離反した見方に付き随わない者たちのうえに置かれ、第二の至福は〈幅広く平坦な道〉（マタイ7,13）に固執しない者たち、ないし律法のうちに生まれあるいは異邦人から回心した者たちの上に置かれ、さらに〈悪疫の座〉というのは、劇場ないし陪審院のことであり、あるいは、もっと蓋然性があるのは、悪しく破壊的な権力への追従またそれらの業への協力を意味する、と。2) 〈しかしながら主の意向は主の法のうちにある〉（詩篇1,2）。ペトロは『ペトロの宣教』の仲で、主のことを「律法と御言葉」と呼んでいる。3) しかるに律法者は別の仕方、三つの方法による罪からの距離のとり方を教えているように思われる。まず初めは、言葉を持たぬ魚を通じての言葉による道。というのも沈黙が言葉と異なるところのものは、真に存在するのであるから。〈沈黙の賜物には危険がない〉（エウピデス『オリストス』638以下）。続いて、略奪的で肉を食らう鳥を通じての業による道。そして豚を通じての思惟による道である。なぜなら豚は<sup>6</sup>〈泥を喜ぶ〉か、もしくは糞を喜びとするからである。というのも、汚れた良心を持つことは許されないからである。69.1) したがって、預言者が次のように述べるのはおそらくこの意味においてなのであろう。彼は言う。〈不敬なる者の道はこうではない。むしろ風が大地の面から吹き飛ばす秕殻のようだ。それゆえ不敬なる者どもは、裁きの場に立つことはないであろう〉（詩篇1,4-6）。（彼らはすでに裁かれてしまっている、なぜなら〈信じない者はすでに裁きを受けている〉（ヨハネ3,18）のだから）。〈罪びとたちは、正しき者たちの審議の場に加われない〉（なぜなら彼らは、躓くことなく生きている人々と一体となることはないという裁きをすでに受けているのだから）、〈主は正しき者たちの道を知り、不敬なる者たちの道は滅びに向かう〉。2) さらに主はじかにわれわれに向けて、躓きと過ちをも示している。その際、諸情動に対応する治療の方法を提示し、われわれがエゼキエルを通して牧者たちの許に正されることを望み、彼らの中のある者たちについて、掟を守っていないとして難詰している。3) それは〈お前たち

は弱い者を強めず> (イェキエル 34,4) 以下<誰一人、探す者もなく、尋ねもとめる人もいない> (イェキエル 34,6) までの部分である。<なぜなら一人の罪びとが救われたとき、父の許での喜びは大きい> (ルカ 15,7) と主は言われる。4) かくしてアブラハムは<主が彼に語ったとおりに歩んだ> (創世 12,4) がゆえに大いに賞賛されるべきなのである。70.1) ここから、ギリシアの知者の一人は着想を得て<神に付き従え>と叫んだ (ピュタゴラス)。イザヤは言う。<敬虔な者たちは、高貴なはかりごとをめぐらす> (イザヤ 32,8)。2) しかるにはかりごととは、いかにすれば直面する問題に対して正当に対処できるかについての探求である。一方、善き慮りとは、意向をめぐる賢慮である。3) ではどうだろうか。神もまた、カインに対する寛容さ (syngnōmē) の後、その連関で少しく後に、回心を経るエノクを登場させているのではないか。これはすなわち、回心は本性的に寛容を生むということを表しているのではないだろうか。しかるに寛容とは赦しによってではなく、癒しに伴って成立する。同じことは、アァロンによる民のための子牛の作製の際にも起こっている (出エジプト 32)。4) ここからギリシアの知者の一人 (ピュタゴラス) は、<寛容は処罰よりも強力である>と呼ばわっている。すなわちちょうど<誓願を立てる際には、迷妄からは離れよ> (ストロテイス 1.14.61.2 参照) が、次のように語っているソロモンからの借用であると同様である。<子よ、もしお前が友人の保証人となるのであれば、あなたの手を敵に差し出せ。人にとって、自分の唇は強力な罠であり、自分の口の言葉によって捕えられるものだ> (箴言 6,1 以下)。5) すでに<汝自身を知れ>という、より神秘的な言葉がここから取られている。<あなたは自分の兄弟を目にし、あなたの神を見るのだ>。71.1) かくして<あなたの神である主を、心のすべてを挙げて愛し、あなたの隣人を、あなた自身と同じように愛せ> (マタイ 22,37)。主は、この掟のうちに律法と預言者の全体がかかっており、また支えられていると述べている。<これらのことをわたしがあなた方に話したのは、わたしの喜びが充溢するためである。わたしの掟とはこれである。すなわち、わたしがあなた方を愛したように、あなたがたも互いに愛し合え> (ヨハネ 15,11 以下)。3) <というのも主は憐れみ深く憐れみに満ちた方だからである> (詩篇 110,4)、そして<主はすべてにおいて善き方である> (詩篇 144,9)。一方<汝自身を知れ>をより明瞭に勧告しつつ、モーセはしばしば次のように述べる。<あなた自身に十分注意せよ> (出エジプト 34,12 など)。4) <施しと信頼のうちに罪は滅ぼされる。しかるに主に対する恐れによって、すべての者は悪から遠ざかる> (箴言 15,27)。<主に対する恐れは教養であり知

恵である>（箴言 16,4）.

## XV. われわれはある種の間人形態論なくしては神に関して語りえないこと.

72.1) さてここで再び、喜びや苦痛とは、靈魂の情動であると言って非難する者どもが現れる. というのも喜びとはロゴスを伴った高揚であり、歡喜するとは、美なるものに喜びをなすことであるのに対して、憐れみとは、苦痛を過度に被る者に対して生じるものであるから、そのようなものは靈魂の諸様態であって、情動であるというのである. 2) これに対してわれわれは、思われるに、聖書を肉的に思惟することを止めず、われわれの情動から類比的に考えることを続ける. すなわち、情動を被らない神の意向を、われわれの運動と同様に受け取るのである. 3) だが、われわれが聞くことができるのと同じように、全能の神についても同様だと仮定するならば、それは神を忘れて彷徨っていることになる. 4) というのも、神性に関しては、現在こうであるのに対して過去においても同じようであったと言うことはできないからである. だがちょうど、肉に絡みつかれているわれわれは、感じるのと同じように、預言者たちはわれわれに語りかけた. それは主が、人間の弱さに対して救いの点で配慮を行ったためである. 73.1) さて神の意思とは、掟に従順なる者たちおよび過ちから回心する者が救われることであるから、われわれは自らの救いに喜びをなす. 主はわれわれの喜びを、預言者を通して語りつつ、自らのものとする. それはちょうど、福音において主が人間愛に満ちた言葉でこう述べているとおりである. <わたしが飢えていたとき、あなた方はわたしに食べさせてくれた. わたしが渴いていたとき、あなた方はわたしに飲ませてくれた. これらの最も小さき者たちの一人にあなたが行ったことは、わたしにしてくれたことなのである>（マタイ 25,35.40）. 2) したがって、彼自身が食物を得ていなくとも、彼の望む人が食物を得ていれば、それによって彼が食物を得ることになるのと同様に、彼が望んでいたとおりに回心した人物が喜びのうちに包まれれば、それによって、彼自身が転向していなくても、彼は喜びに満たされるのである. 3) しかるに善き方である神は、律法を通して掟を与えることで豊かな憐れみを示し、更に預言者を通じて、また子の臨在を通じていとも率直に救う. 言われているように、憐れみ深い人々を憐れむ方なのである. つまりより優れた人がより劣った人を主として憐れむ. そして人間として生まれた以上、

人間が人間よりも優れているということはなく、神がすべてにおいて人間よりも優れているのである。だからもしより優れた人が劣った人を憐れむというのであれば、ただ神だけがわれわれを憐れむことになる。4) というのも人間は、正義の下に共同体的であり、神から受けたものを分かち合うが、それは本性的な好意と習性により、従っているところの掟によるためである。74.1) しかるに神は、われわれに対して本性的な習性をまったく有していない（有しているとするのは、諸異端の創始者たちの望む説である。神がわれわれを、非存在から創られたにせよ、質料から創られたにせよ、有していないのである。なぜなら、神はいかなる点でも欠けたところのない存在者であるのに対して、われわれはあらゆる点において、神とは異質のものだからである）。ただある人は、ある部分に関してわれわれが神と同一本質であると敢えて言わんとするであろう。2) というのも、神のことを知っている人があったとして、どのような心でかは知らないが、次のように主張するからである。もし神がわれわれの生に目を留めているのなら、われわれが悪に染まっているとき、われわれを氣遣うはずだ、と。3) というのも、これは語るも許されぬことであるが、もし全体の一部が一部として、相共に全体を満たしているとすれば、神はこの一部において罪を犯すことになるだろう。だがもし全体を満たしていないとすれば、それは一部ということにはならないだろう。4) なぜなら、本性的に＜神は憐れみにおいて豊かである＞（エフェソ2,4）が、それは神の善性ゆえにわれわれを見守っているためであり、われわれが神の一部であるためでも、本性的に子であるためでもない。75.1) 実に、神の善性の最大の証拠は次のことであろう。それは、われわれが神に対してこのような態度であり、本性的にもまったく＜異なって＞（エフェソ2,14）いるにもかかわらず、それでもなお神がわれわれのことを氣遣っておられるという点である。2) というのも子供に対する慈愛は、動物にとって本性的なものであり、習慣に由来する同気質の者への友愛も同様であろうが、いかなる点においても神には似つかわしくないわれわれに対する豊かな憐れみは、神のものだということである。それはわれわれの本質、あるいは本性、また力に関してであり、われわれに固有の本質に照らしてであり、われわれは神の意図の業であるという点だけにおいてそうなのである。実に神は、自ら進んで鍛錬と教えとにより、真理に対する覚知を備えた者の子たる身分へと招くが、この身分はすべてのうちで最大の跳躍なのである。3) ＜不法は人をがんじがらめにし、各人は自らの罪の縄に縛られる＞（箴言5,22）。したがって神にその責任はない。＜すべてに対して敬虔の念から身を低くする人は幸いである＞



（箴言 28,14）.

## XVII. 知識のさまざまな種類.

76.1) かくして、知識とは知の様態なのであり、ここから知ということが生じ、知による変わることのない把握はロゴスによって生じる。ちょうどそれと同じように、無知とは譲歩的な幻想であり、ロゴスによって変わり得る。しかるに变化しうるものは、われわれの中で、ロゴスによって鍛錬されうる。2) 一方経験、洞察、理解、思惟、覚知は、知識の傍らに置かれる。3) まず洞察は、全容に関する事柄の、形相によるものであろう。次いで経験とは、把捉的な知識であり、各々の事柄に関して探究が可能となる。一方思惟とは、思惟されるものに関する知識である。また理解とは、知解可能な事柄に関する知識、あるいは変わることのない知解、もしくはそれに関する賢慮が知識でもあるような事物に対する知解的な力であり、一なるもの、各々のもの、また一なるロゴスに属する万物に関わるものである。しかるに覚知とは、まさしく存在者そのものに関する知識、あるいは生成物に協和した知識である。真理と知識は真なる存在に関わる一方、真理の様態が真なる存在に関わる知識である。77.1) しかるに知識はロゴスによって成立し、他のロゴスによって変わったりすることのないものである。

2) さて、われわれが為さない事柄は、不可能ゆえに為さないのであるか、もしくは望まないから為さないのであるか、あるいはその両方による。3) われわれは飛ばないが、これは不可能なためであるし、望みもしないからである。われわれが泳がないのは、言うてみれば、可能ではあるが望まないからである。われわれが主のようなのではないのは、望んでいるが不可能だからである。4) <いかなる弟子も師を越えるものではない。師のようになりたいと望むだけで十分である>（マタイ 10,24 以下）。それは実体によることではない。なぜなら実在に対しては、本性的に状況の上で等しくなることは不可能だからである。それは永遠なる存在となり、諸事物の観想の術を知悉し、「子ら」と呼ばれ、父だけを親族として観照することによる。5) しかるに何事にもあれ、望むことは推奨される。というのも望むという理性的な力はしもべ的なものだからである。主はこう言う。<望め。そうすればできるようになるだろう>（ヨハネ 5,6）。しかるに覚知者にあつては、意向と判断と鍛錬は同一のものである。というのももし前提が同じであれば、教説と判断も同一になるためである。その結果、彼

にあって、言論と生、それに生き方が、その内的成立に追随するからである。〈真っ直ぐな心は覚知を求める〉（箴言 27,21a）、そして主はそのような覚知を賞賛している。〈神はわたしに智慧を教え、わたしは聖なる事物の覚知を得た〉（箴言 24,26）。

### XIII. モーセの律法の道徳的・靈的卓越性.

78.1) かくして、モーセによって書き留められているすべての徳が明らかになった。これらはギリシア人たちに、すべての倫理的トポスの端緒を提供したものである。順に挙げるならば、勇氣、節制、賢慮、正義、強壯、堪忍、莊嚴、克己、そしてこれらに加えて敬虔である。2) しかしながら敬虔は、畏れ敬うことを教えるがゆえに、いとも明らかに、至高にして最も年長の原因である。3) 一方正義もまた、律法自体が提示するものであり、感覺的偶像からの離脱と万物の創造者にして父への呼び求めを通じての賢慮を教える。その栄光をいわば泉として、すべての理解が増し加わるのである。4) 〈不法者のいけにえは主の嫌悪するところ、正しき者の祈りは主に受け容れられる〉（箴言 15,8）。なぜなら〈神において受け容れられるのは、いけにえよりもむしろ正義〉（箴言 16,7）だからである。79.1) このような言葉は、『イザヤ書』にもある。〈「あなたがたの大量のいけにえが、わたしにとって何の意味があるのか」と主は言われる〉（イザヤ 1,11）およびこの節全体である。〈すべての不正の束縛を断ち切れ。神に受け容れられるいけにえとは、打ち碎かれた心と、創造者を求める思いだ〉（イザヤ 58,6）。2) 〈偽りの天秤を主は厭い、十全なおもり石を喜ばれる〉（箴言 11,1）。これに関連して、ピュタゴラスは〈天秤を踏み越してはならない〉と勧告している。3) しかるに異端の告知では、正義とは偽りだと語られている。〈不正な者どもの舌は破滅をもたらし、正しい者の口は智慧を滴らせる〉（箴言 10,31 ; 16,21）。しかしながら人々は〈知恵ある者、賢慮に満ちた者を卑しき者と呼ぶ〉。4) これらの徳に関する証言を提示するのは長きに及ぶことになる。聖書は全編にわたり、これらの徳を称えている。5) かくして、勇敢さとは恐ろしき事ども・恐るべきでない事ども・その中間に関する知識であり、節制とは、選択と回避において、賢慮の基準を保つ様態であり、堪忍も勇敢さに伴い、それは克己とも呼ばれて、耐えるべき事柄・耐えるべきでない事柄に関する知識である。また寛厚とは、生起する事柄を超越する知識であるが、敬虔さもまた、節制に寄り添い、これはロゴスを伴った回避である。

80.1) しかるに掟を守ること、すなわちそれらを過つことなく墨守することは、躓きのない生を獲得することである。勇敢さなくしては堪忍ということはありません、節制なくして克己ということもありえない。2) 諸徳は相互に随順するものであって、そこに諸徳の連関も存し、そこに救いが存し、良き生き方の維持も存するのである。3) これらの諸徳に関して相応しく推察するならば、われわれはすべての徳に関して次のことを確認できるであろう、すなわち、一つの徳を覚知的に有している者は、そこからの連関によってすべての徳を有しているということである。4) 克己とは、正しきロゴスに適っているように思われる事柄を直ちに踏み越えないような状態である。しかるに正しきロゴスに反する衝動を有していながら正しきロゴスに反して衝動に走らないように自らを持する者は、克己に生きているのである。5) 一方、節制とは勇敢さなくして存在し得ない。というのも、掟があってこそ、命じる神に対する随順の賢慮、および神の定めを模倣する正義が生じるからである。この正義に従って克己を行う者は、敬神の念に照らして浄らかであり、神に聴き従い随順する行為を打ち立て、本性的に死すべき身であるわれわれにとって、可能な限りにおいて主に似たるものとなる。81.1) このことこそ、<賢慮をともなって正しくまた敬虔となること>（プラトン『テイテス』176AB）である。なぜなら神性とは何も欠けたところがなく、また無情動であり、そこからなんら本質的に克己を必要としない。というのも神は、情動に屈するということがなく情動を制している。しかるにわれわれの本性は、情動を被り克己を必要とする。この克己を通して、足りないものが少なくなるよう、鍛錬を尽くして、状態の上で神的な本性に近づくように努めるのである。2) というのも真摯なる者は足りないものが少なく、不死なる本性と死すべき本性の中間にあり、身体的にまたその生まれからして足りないものを有しているのであるが、理性的な克己を通じて不足するものがわずかになるよう教えられているのである。3) であるから、男性に対して女性のショールを着用することを法が禁じているのは、どのような理由があるのだろうか（申命 22,5）。あるいは主はわれわれが、身体的にも、業の面でも、思惟の面でも、言葉の面でも女性っぽくならず、男性化することを望んでいるのだろうか。4) というのも真理に励んでいる者は、堪忍においても我慢においても生においても生き方においても言葉においても鍛錬においても、夜も昼も、男性的であることを望んでいる。それはたとえ、血による証しを立てることが必要となったときでさえもそうである。82.1) また人間愛に満ちた律法が命ずるには（申命 20,5-7）、新しく家を建てて、まだ住んでいない者、

あるいは新しくぶどう畑を作り、まだ収穫をしていない者、あるいはまた、婚約しただけで、まだ結婚していない者、これらの者たちに対しては、兵役が免ぜられる。2) これはまず、兵法の観点から言えば、われわれが欲情に気を散じて、積極的に戦事に携わることができなくなならないように（というのも果敢に危険に身をさらす者たちは、衝動から自由の身であるから）、3) 次に人間愛の観点から言えば、戦事に関わる事柄は不明瞭であるし、自らの労苦の恩恵を受けない者がいる一方で、労苦した者たちの実りを労せず他人が受け取ることは正義に悖ると判断しているからである。83.1) 律法は靈魂の勇敢さを強調しているように思われる。律法を制定する際に、植えた者は収穫すべきであり、家を建てた者は住むべきであり、婚約した者は結婚すべきであるとされている。その理由は、鍛錬した者たちにとって、覚知の論理からすれば、希望が完遂されずにおかれることのないように備えているのである。2) <死した>人間、また生ける人間で、<善き人の希望は潰えない>（箴言 11,7）。知恵はこう語っている。<わたしは、わたしを愛する者たちを愛しよう>（箴言 8,17）。知恵は語る。<わたしを求める人々は平和を見出すであろう>、以下である。3) これはどういうことなのだろうか。モアブの女性たちは自らの美しさを以て、戦うヘブライ人たちを、無克己を通じて節制から無神へと誘惑しなかっただろうか（民数 25）。というのも彼女たちは、ヘブライ人たちを荘嚴な鍛錬から、その美しさで誘惑することによって、遊女的な快樂へと誘惑し、偶像への供儀と、異国の女性へと狂わしめたのであった。女性と快樂とに敗れた者たちは神から離反し、律法から離反し、ほとんど、すべての民が女性的な戦法によって敵の膝下に屈せんばかりとなり、ついには律法に対する恐怖が、危難に臨む彼らに対して、正気を逸させるまでに及ぶ。84.1) かくして果敢に危険と立ち向かい、これを生き延びた者たちが、敬神の念をめぐる闘いを制して敵に勝利打ち勝ったものとなる。<知恵の初めは敬神、聖なるものに対する理解は先慮、しかるに律法を知ることは、善き思惟の業>（箴言 9,10）。2) しかるに律法を、情動に満ちた恐怖を生み出すものと受け取る者たちは、理解に長けてもおらず、また真に律法を思惟することもない。<なぜなら主への恐れは生命をつくる。しかるに彷徨う者は労苦のうちに導かれ、その中で覚知を知ることがない>（箴言 19,20）。3) すなわち神秘的な仕方でバルナバは、こう述べている。<神、全宇宙の統率者が、あなた方に、知恵と理解、知識、それに神の正義をめぐる覚知、堅忍を与えてくださるように。そうしてあなた方が神に教えられた者となり、主があなた方に何を求めているかを探求し、あなた方が裁きの日

にそれを見出すことができるように>。これらの事どもに通じた人々を、バルナバは<愛と平和の子ら>と、覚知をもって名づけている。4) しかるに与え合いと分かち合いをめぐっては幾多の言論が存在するが、その中でただ次のことを述べておくだけで十分であろう。すなわち律法は、兄弟に対して貸すことを禁じている（出エジプト22,25）。ここで「兄弟」とは、同じ両親から生まれた者だけではなく、同胞、同じ見解を持つ者、同一のロゴスを分かち合う者をも指している。金銭に関して正しき者の利息を選ぶのではなく、開かれた手と思いで、事欠く人々を喜ばせるということである。5) というのも神はそのような恵みの創造者である。すでに、与える者は、受けるに相応しい利息、人間の間でもっとも貴重なもの、すなわち優しさ、有用性、寛容さ、誉れ、榮譽をも受け取るのである。

85.1) いったいあなたには、この教えが、ちょうど<貧者の報酬はその日のうちに払わねばならない>（申命 24,14）と同じように、人間愛の教えだとは思われないだろうか。奉仕に関する報酬は、遅滞することなく支払わねばならないということをこれは教えている。というのも思うに、貧しき者が飢えるとき、その欲求は、将来に向けて力失せるからである。さらに、彼が言うには、金貸し屋は、担保を力づくで取ろうとして、借金をしている者の家に立ち寄ってはならない（申命 24,10 以下）。むしろ家の外にいて、担保を持って出て来るように命じよ、またその担保を持ったまま床に就いてはならない、と。3) かつ収穫の際に、一束が落ちていたとしても、地主に対して、主はそれを取り上げることを禁じている（申命 24,19）。それはちょうど、刈り入れの際に、切られていない穂をそのままにしておくように勧告しているのと同じ精神性である。このような形で、地主は共同体精神と寛容さに向けて、自ら個人のものが必要としている者たちのために、進んで分かち与えるべく鍛錬を積み、貧者に対して食糧の源を提供するのである。86.1) このように、律法の制定が、神の正義とともに、その善性をいかに告げるものであるかが、おわかりであろうか。その際に神は、万人に妬みなく、糧を分かち与えるのである。2) また神は、穀物のうち放置されているものを摘む者たちを攻撃すること、落ちた房を集めることを禁じている（レビ 19,10）。同じことは、オリーブを集める者たちにも規定されている（申命 24,20 以下）。3) 実に、実りと農作物の10分の1は、神的なものを崇敬することおよび全面的に利得を好むことのないようにすること、そして人間愛を隣人に分かち与えることを教えるものである。思うにこれらの初穂から、祭司たちも養われていたのである。4) 従ってわれわれは、

われわれが敬虔さと共同体、正義と人間愛に向け、すでに律法において教育されているということを理解できるだろう。5) ではどうなのか。いったい律法は、7年目ごとに、土地を休耕地のまま放置するように規定してはいないだろうか。これは貧しき人々に対して、恐れることなく、神によって育つ実りを享受するよう命じるものであり、望む者たちのために自然が耕作するのに任せる精神ではないだろうか。どうして律法が有用でなく、正義の師でないことがあるのか。6) また50年目ごとに、7年目と同じことを実行するように命じ、もし誰か、その間に何らかの状況のために土地を奪われた者があれば、その各々に固有の土地を返し、財を得たいと望む者たちの欲求を、期間を区切って規定し、長きにわたる貧困のうちにある者たちに収穫させ、生涯を通じて懲罰を受けた者たちへの憐れみを表すことを規定していないだろうか（レビ 25,8 - 13）。7) <憐れみと信仰は、王的な守り>（箴言 20,22）であり、<祝福は分かち与える者の頭に>（箴言 11,26）あり、<憐れみ深い者は貧者を幸いにする>（箴言 14,21）。なぜならその人は、人類の創造主に対する愛のゆえに、同胞に対して愛を示す者だからである。

87.1) 上述の事柄は、他にもより自然学的な提示を含んでいる。それは休息と、嗣業の享受に関するものである。しかしそれらをいまこの場で読むべきではない。2) 一方愛は、多くの箇所で、柔和さ、有用性、堪忍、妬みや嫉妬心のなさ、憎しみのなさ、悪の記憶のなさを通して考えられている。なぜなら愛は、全体を通じて分かたれざるもの、裁かざるものであり、共同体的だからである。3) また聖書には、<もしあなたが、家の者、友人、あるいは総じてあなたが知っている人の家畜が荒野にさまよっているのを目にしたなら、連れて行って返してやるべきである。その主人がたとえ遠くに離れていたとしても、主人がやって来るまであなた自身の家畜とともに世話し、返してやらねばならない>（申命 22,1 - 3）。こうして律法は、自然的な共同体性を通じて、発見が手付金と見なされるべきこと、敵に対して悪の思いを抱かないことを教えているのである。88.1) <主の命令は生命の泉>（箴言 14,27）。実に、そうであり、<死の畏から逸らしてくれる>。ではどうなのか。主は旅人をも愛するように命じておられるではないか、しかも友人また親族としてばかりでなく、自分自身のように、身も心もともにである。2) 実に、主は異邦の者を尊敬し、災いをもたらした者たちに対しても、その悪意を記憶しておこうとはされなかった。じかにこう述べている。<エジプト人を疎んじてはならない、あなたはエジプトで寄留の民だったのだから>。ここでは、異邦の者あるいはすべてこの世に属

すものが「エジプト人」と呼ばれているのである。3) しかるに敵方に関しては、たとえすでに城壁のそばに立ち、町を占領せんばかりであっても「彼らに使いを遣り、和平の勧告を行うまでは、決して敵と見なしてはならない」（申命 20,10）。4) 実に、捕虜の女に対しても、決して倣岸に振舞って語らってはならず、<彼女を自分の家に連れてきて、30日間、彼女の望むままに嘆かせ、その後、衣服を換えて妻とし、法に従って娶れ>（申命 21,10 - 14）。というのも共生は倣岸のうちに行為されるべきではないし、遊女のように賃金稼ぎの目的で行われてもならない。むしろただ子供の誕生だけのために語らいが成立するのを良しとしているのである。89.1) ここに、克己を伴った人間愛があるのがお分かりであろうか。捕虜の女性の主人でありかつ彼女を愛する者となった場合、その彼に対して聖書は、快楽を享受してはならないと説き、一定の期間を置くことで情欲を打ち砕き、さらに加えてはその捕虜の女の髪をも切って、思上がった愛欲を恥じ入らせるように命じているのである。というのももし理性が、結婚するようにと説き伏せたならば、彼女を辱めたまま、彼女と交わることになるだろうからである。2) しかる後、もしその人が情欲に飽いてしまい、もうその捕虜の女と共に住むことを良しとしなくなったならば、彼女を売り飛ばすのではなく去らせるよう、律法は命じている。すなわち、あるいは下女として有することもならず、彼女が自由の身となり、仕えの身分からも解放されることを律法は望んでいるのである。それは彼女が、誰か他の女性が家に入ってきたときに、嫉妬心から致命的なことを蒙らないようにするためである。

90.1) ではどうなのだろうか。敵の重荷を負える家畜の荷を軽くしてやり、助け起こしてやるように（出エジプト 23,5；申命 22,4）命じるだけではなく、主はさらにわれわれに対して、敵に対してその不幸を喜ぶ心を抱かないように、またそれに勝ち誇らないように教えているのである。これは、それらによって鍛錬を受け、敵のために祈ることをも教えるためである（マタイ 5,44）。2) というのも妬みを抱いたり、隣人の幸福を苦痛に感じたりするのは適切なことではないし、ましてや隣人の不幸に対して快楽を得たりするのはもってのほかだからである。律法は語る。<もし誰か敵の家畜がさまよっているのを見つけたならば、争いのめごとなどは放っておいて連れ戻し、返してやらねばならないなら>（出エジプト 23,4）。というのも善美（kalokagathia）は大赦（amnēstia）にともなうものであり、そこから敵意の解消も起こるからである。3) こうしてわれわれは協和（homonoia）の思いを備えることができるのであり、この協和は幸福（eudaimonia）に導くのである。たとえ習慣からある人を敵だと

受け取っても、それを情動ないし憤激 (thymos) による非理性的な思い違いだと解して、敵であるという思いを善美へと転換させるべきなのである。

91.1) かくして律法が人間愛に満ち、憐れみに満ちたものである (chrēstos) ということがもう明らかになったであろう。〈律法とはキリストに向けて訓導するものであり〉(ガラテヤ3,24)、神自身、正義をともなった善なる方であって、初めから終わりまで、各々の世代を相応しく救いに向けて用いる方ではないだろうか。2) 主はこう言われる。〈あなた方が慈しみを受けるように、慈しみ深くあれ。あなた方が赦してもらえるように、赦せ。あなた方に対して為されるように、為せ。あなた方に与えられるように、与えよ。あなた方が裁かれるのと同じように、あなた方も裁け。あなた方が憐れまれるように、あなた方も憐れみ深くあれ。あなた方が測るその測りで、あなた方も測られるのだから〉(コリント13,2 に対する『第1クルムス書簡』より)。

3) さらに律法は、食糧のために奴隷となっている人々を蔑むことを禁じている (レビ<sup>26</sup> 25,39 - 43)。また負債のために奴隷となっている人々に対しては、7年目ごとに完済する「負債帳消し」(ekecheiria) を定めている (出エジプト21,2; 申命15,12) さらに、嘆願者を懲罰に付すことも禁じている。4) かくして次の聖句はすべてにまさって真実なものであろう。〈金と銀が炉で試されるように、主は人の心を試される〉(箴言17,3)。5) また〈憐れみ深い人は寛容であり、思いを致す人にはすべて、知恵が内在する。思いを深くする人には思慮が備わり、彼は賢慮を備えた人として生命を探求する。神を探求する人は正義を備えた覚知を見出し、神を正しく探求する人は平和を見出す〉。

92.1) ところでわたくしには、ピュタゴラスもまた、理性をもたない動物の「温和さ」(hēmeron) ということについて、律法から取り込んでいるように思われる (プルタルコス『肉を食べることについて』993A 以下)。すなわち、生まれたばかりの動物による、羊や山羊や家畜の群れのすべてに関して、供儀を名目とせず捕らえた場合、律法はそれを殺傷しないよう命じている (出エジプト23,19)。それは子のためにも母のためにも行われる。これは、理性を持たぬ動物を通じて人間を柔和さに向かわしめるためであろう。2) 律法は述べる。〈最初の7日間、子供を母の許で楽しませよ〉。というのも乳が、子を産んだばかりの母親に、子を育てるために滴るとするのが理由のないことではないとすれば、乳をめぐる経綸から、生まれた子を引き離すのは、自然本性を蔑ろにすることだからである。3) したがって、ギリシア人にしても、あるいは他の人にしても、律法から略奪している者があるとすれば、恥じ入るがよい。彼ら



のあるものは、理性を持たない動物に対して憐れみ深くあり、またあるものは、人間の子に対してもこれを遺棄するが、はるか以前、預言者的に、律法は彼らの残忍さを、上述のような掟を通じて打ち砕いているのである。4) というのももし、理性を持たない動物の子に関しても、母親が乳を与える前に子を分離してしまうことを律法が禁じているとすれば、人間に際しても、残忍で酷薄な考え方を前もって排除すべきなのは言うまでもない。それは自然本性と、学びとを蔑ろにさせないようにするためなのである。93.1) 子ヤギと子羊がはらむのは放任されているわけで、母親から子供を引き離すものにも、おそらく何か理由があろう。しかるに子供を遺棄することにはどのような理由があるのだろうか。そもそも、子供を儲けることを望まぬ者に嫁する必要はないし、快樂の不節制によって子殺しとなることはあってはならないのである。2) 憐れみ深い律法は、改めて、同日に子と母とをいけにえに供することを禁じている（レビ 22,28）。ここからローマ人もまた、もし妊娠している女性が死罪に定められた場合には、出産するまではその処罰を被ることを許さなかった（アリアス『ギリシア奇談集』5.18）。3) したがって総じて、動物のなかで妊娠しているものに関しては、法は、母親が出産を終えるまでは、屠られることを禁じている。これは遠く、人に対して不正を働いた者たちに対する忍耐を要求するものである。4) かくして、非理性的な動物に至るまで、公正さ（epieikes）が及んでいる。それはわれわれが、異なった種族において教えを受け、同じ種族にあっては、いわば人間愛を充溢させようようにするためなのである。94.1) しかるにある動物に関して、分娩前にその腹をあたり構わず蹴飛ばす人々がいる。乳を満たしたその肉に与かるためである。出産に向けて備えていた母親の体を、懐胎した動物の墓としてしまうわけである。これに対して律法家は＜子羊をその母の乳で煮てはならない＞（申命 14,20）と明瞭に命じている。2) というのも生けるものの食糧として、殺された動物の調味料が用いられることがあってはならないのであり、律法は、生命の根源が身体の破壊のための協働者となってはならない、と言っているのである。3) しかるにこの同じ律法は、＜脱穀している牛にくつこを掛けてはならない＞（申命 25,4）と規定している。3) というのも＜働き手がその報酬に適う者とされるのは当然＞（1テモ 5,18）だからである。4) また同じく、地面を耕す際に牛とロバとを同じくびきに掛けることを禁じている（申命 22,10）。これはおそらく、動物とは異縁なものを目指しており、異なった部族の者に対しては不正を働いたり、くびきに掛けたりしてはならない、もし異種族だということ以外に理由を見出すことができないのであ

れば、それは理由を問えない問題であり、悪ではないし悪に駆られたことでもないのだから、という意味であろう。5) わたしには、この比喩は次のことを告げているように思われる。すなわち、浄らかなもの・浄らかでないものを等しく扱ったり、信篤きもの・不信なるものをあわせて御言葉の耕作に与からせたりしてはならない、という意味である。それは、かたや牛は浄らかであるのに対して、ロバは不浄なるものと考えられているためである。

95.1) さて、人間愛に関して惜しむことを知らず、憐れみ深い御言葉は、「温和さ」(hēmeron)の質料でない事柄に関しては、それらを切り倒すのが適当であると教えている(申命20,19)。またただ荒らすだけのために、収穫前の穂を刈ることは許していない。総じて実りと温和さを、大地においてであれ霊魂においてであれ、破壊することを許していないのである。したがって敵の土地に対しても、そこで木を切り倒すことを認めていないのである。2) 実に、農事に携わる者は、この点に関しても律法から恩恵を被っているのである。なぜなら律法は、新たに生えた樹木に関して、それから3年の間は育つままにし、その後余分な芽は切り落とすように命じているからである。重くなった部分が負荷をかけたり、食糧の分を切り落とすことで力を落とし、樹力が失われたりしないようにするためである。むしろ丸く刈り込み、周囲を掘り込んで、脇に生え出てくるものが成長を妨げないように命じている。3) また未熟な樹木から未熟な実りを摘むことも許さず、むしろ3年間を経た後4年目に、その樹木が成熟してから、初穂を神に奉納せよと命じている。96.1) おそらく、このような農事の型(typos)は、教えの一方法なのだと思う。すなわち罪のヒコバエのようなもの、またまっとうな実りと一緒に生え育った虚しき思惟の雑草は、信仰の若枝が完成し確かなものに育ったならば、切り落とすべきであることを教えているのである。2) というのも4年間とは、しっかりと教えを授かるために必要な時間であり、徳の4つ組は神に基礎を置くが、3年間の滞留は、主による4番目の実体の上に継がれるものだからである。

3) しかるに讃美のいけにえは、焼き尽くす献げ物(holokautōmata)に勝る。〈あなたに富を築く力を与えたのは、主である〉(申命8,18)。もしあなたにおいて物事が照らされるなら、力を受け獲得し、覚知において富を成すであろう。4) というのも、それらを通じて諸々の善き事どもが光を放つとともに、それらの賜物が神から供せられたものであること、われわれは神的な恩寵の僕となって、神の善行の種を蒔き、隣人たちを美しく善き人々に備えるべきことが明らかになるからである。それは、可能な限り、賢慮ある者は克己心溢れる

人々を、勇敢な者は真摯なる者を、思慮深い者は知性ある者を、そして正しき者は正しき者を完成させることができるためである。

## XX. 覚知者はいかにして神の模倣者たりうるか。

97.1) この人こそ<神の像また似姿>であり、覚知者であって、可能な限り神を模倣する者であり、受け取った似姿に関わるものを何一つ看過することなく、止むことなく克己に専心し、正しく生き、情動を統御し、可能な限りにおいて持てるものを分かち合い、言葉においても行動においても善行を為す者である。2) この人こそ、<天の王国において、為すにも教えるにも最も偉大なる者>（マタイ5,19）であり、彼は隣人に恵むに際しても神を模倣する。なぜなら神の贈り物は、共通に益を施すからである。3) 聖書にはこう記されている。<何事であれ、倣岸から行おうと試みる者は、神を蔑ろにする>（民数15,30）。というのも、詐欺とは靈魂の悪であり、主はここから他の悪に関しても回心し、生を、不調和からより優れた転換に向けて整えるように命じている。それは口・心・手によるものである<sup>7</sup>。98.1) しかるにこれらは象徴的表現なのであり、手とは行為の、心とは意向の、そして口とは言葉の象徴である。かの名言集は、回心する者たちに関して美しくもこう述べている。<神を、今日、あなたの神として選び取れ。そうすれば主は、あなたが今日、主の民となることを選びとって下さる>（申命26,17）。というのも、真の存在者に仕えようと尽力する者を、神は嘆願者として己がものとして下さるからである。2) たとえ数の上で1であっても、神は民に等しく敬愛されている。神は自らの民のうちに充溢する部分なのであって、そこから民が生じたところのものの復興であり、全体が部分から呼ばれているのである。3) これこそ最美に向けての選択と鍛錬のうちなる高貴さとして示されるものである。アダムのかくまでに大きな高貴さが、なぜアダムを益したのであるうか。彼の父は死すべき存在ではなかった。アダム自身こそ、誕生における人間の父なのである。4) 彼は妻に従い、恥ずべき事柄を自ら進んで選択してしまった。その際、真理と美とを省みなかったのである。この点で彼は、不死なる生命に代えて死すべき生命を選び取ったが、それは終末に至るまでではなかった。99.1) 一方ノアは、アダムのようにはならなかった人物であり、彼は神の見張りによって救われた。ノアは、自らを持して神に捧げたためである。アブラハムは3人の妻（サラ、ハガル、ケトラ）から子供を儲けたが、これは快樂の享受を通じてではなく、思うに、初め

から氏族を増やすという希望によったものである。だがその中でただ一人が、父祖伝来の財産を嗣業者として受け継ぎ、それ以外の者どもは、彼イサクと共に運命から切り離されてしまった。2) 彼からは双子が生まれたが、そのうち若い方が父に喜ばれる者となって嗣業を継ぎ、祝福を得た。一方年長の兄の方は弟に仕えることになった。というのも悪しき者にとって、随意ならざることが最大の善だからである。3) しかるに経綸は、預言者的でもありまた予型論的でもある。すなわち万物は知者のものであるということ、主は明瞭にこう告げて語っている。〈神がわたしを憐れんでくださったので、わたしにはすべてがある〉(創世 33,11)。すなわちこれは、唯一つのこと、すなわちそれによってすべてが成り、相応しき者たちに約束のものが分かち与えられるような、そのことだけを希求するべきだということを教えているのである。100.1) かくして嗣業者の者は、天の王国における真摯な共生者となった者であると記されている。それは神的な知恵と、律法に従い、あるいは律法以前に法に則って生き、彼らの行動がわれわれにとっての掟となっているような先人たちを通しての方法による。2) あるいはまた、主は知者を王者とも教え、同胞ならざる者たちをして、彼に次のように言わしめたとしている。〈あなたはわれわれのなかで、神から王とされた方である〉(創世 23,6)。これは支配される人々が、徳への熱意から、自発的な考えにより、真摯な者に聴従する場合である。

3) 一方哲学者プラトンは、至福を究極の目的とし、律法の教えに言わば沿って走るにせよ(つまり「偉大にして情動を免れた本性は、真理を射抜く」とピュタゴラス派のフィロンがモーセの教えを解釈しているように)、あるいは学びに絶えず励み、その折々の御言葉から教えを受けるにせよ、「できるかぎり神に似ること」こそ至福だと述べた(『ティテス』176b)。4) 「あなたがたは、あなたがたの神である主の後に従って歩み、わが掟を守れ」(申命 13,5)。というのも、この「似ること」を律法は「聴従」(akolouthia)と名付けているからである。そのような聴従は、力のかぎり似るものとする。主は言われる。「あなたがたは、あなたがたの天の父が慈しみに満ちているように、憐れみ深く慈しみに満ちた者となりなさい」(ルカ 6,36)。

101.1) ここからストア派の人々も、本性に従って生きることこそ究極の目的だという教説を立て、相応しくも神を「本性」と呼び代えた。なぜなら本性は、植物にも種子にも、樹木にも石にも浸透するからである。

2) かくして、次のように語られることの意味は明白である。「悪しき者は掟を理解しないが、掟を愛する者たちは自らのために城壁を建てる」(箴言

28,5). なぜなら「聡い者の知恵は自らの道を識別するが、思慮なき者の愚かさは欺きに至る」(箴言 14,8) からである. というのも「わたしが目を注ぐのは、柔和にして平和な人、わたしの言葉におののく人をおいて他に、誰かあろうか」(イザヤ 66,2) と預言書が語っているからである.

3) しかるにわれわれは、友愛には三種類あるということを教わっている. そしてそのうち、第一にして最上のものは、徳に基づく友愛である. なぜなら、ロゴスに発する愛は堅固だからである. しかるに第二番目で中間のものは、返礼による友愛である. これは共同体的かつ分かち合いの精神に基づき、生活のために有益である. なぜならまず、感謝に発する友愛は共通だからである. しかるに最後にして第三番目のものを、われわれは習慣に基づくものと呼ぶが、ある人々は快樂により向きが変わり、変化しやすいものだと言っている. 102.1) わたしには、ピュタゴラス派のヒッポダモスがいと美しく記しているように思える. <友愛には、神々に関する知識に由来するもの、人間の提供に由来するもの、そして生き物の快樂に由来するものがある>. したがって、哲学者の友愛、人間の友愛、生物の友愛があるということになる. 2) しかるに善行を為す人間は、まさしく神の似像であり、彼のうちにあっては彼自らも善行を為される. ちょうど、船乗りが助けると同時に助けられるのと同様である. それゆえ、もし人が願ってあるものを得たならば、与え主に対してこう言うことはない. <あなたの贈り物はすばらしい>. むしろ、<あなたはすばらしいものを得た>. こうして、与える者は受け取り、受け取る者は与える. 3) <憐れみをかけ、憐れみ深い者は正しき者である>. <大地に住む人々は高貴である. 大地の上には悪のない人々だけが残されるであろう. しかるに法に反する者どもは大地から絶たれるであろう> (箴言 21,26; 2,21 以下). 4) わたしには、ホメロスが<友には与えよ> (ホロス『テュモイア』 17.415 参照) と言っているのは、信厚き者のことを予言してのことだと思える. すなわち、友が、いっそう友であり続けてくれるために、友とは分かち合うべきである. 一方、敵が敵であり続けられないために、敵に援助すべきである. 好意は援助とつながっており、敵意は解かれる. 5) しかしながら、<もし、進んで行く気持ちが先立つならば、持っていないものではなく、持っているものに応じて神に受け容れられる. 他の人々には苦の軽減、あなた方には艱難があるということではない. むしろ現段階で平等性が保たれるようにするのだ> (2 コリント 8,12 - 14) 以下の部分である. 聖書は、<彼は散財した、貧しい者たちに施したのだ. 彼の正義は永遠に留まる>と述べている. 6) なぜなら人は<神の似像として、ま

た似姿として> (創世 1,26) 創造されたからである。これは前述したことだが (2.19.97.1), この聖句は単に身体上のことを告げているのではない。死すべき存在を不死なるものになぞらえるのは許されないからである。むしろそれは理性と悟性の点においてであり, そのうちに主は, 善行を為す上での類似性, および支配する上での類似性を相応しくも人間に徴づけたからである。7) というのも人間の支配性は, 身体の質に関してではなく, 思惟の判断によって正されるためである。

「敬虔なる人間の意向によって, 諸国家はよく治められる。  
家もまた然りである」(エウリピデス『アンティオパ』断片 200)。

## XX. 修道主義のかけがえのない役割.

103.1) さて勇敢さは, それ自体神への類似性へと邁進し, 堪忍により無情動 (apatheia) を獲得する。これはハナンヤについて語られた事柄が記憶に新しければの話であり, ハナンヤとは預言者ダニエルもともにいた4人組の一人で, 神秘的な信仰に満ちた人物であった。2) ダニエルはバビロンに住んでおり, それはちょうどロトがソドムに住み, その後<神の友>となるアブラハムがカルデアの地に住んでいたのと同様である。3) バビロニア人たちの王は, ダニエルを野獣たちで満ち満ちた穴へと連れてきて, そこへ放り込んだ。しかしながら万物の王, 信ずべき主が, 傷を受けぬままに彼を穴から引き出した。4) 覚知者は, このような堪忍を獲得するであろう。彼は, この堪忍によってこそ覚知者なのであるから。それは, 真実の人ヨブが試みに遭いながらも祝福を行い, ヨナは海獣に飲み込まれながらも祈ることをやめなかったのと同様である。104.1) かくして信仰は, 彼をニネベの人々に向かって預言する者へと復興させたのである。たとえ獅子たちとともに閉じ込められようと, その獣たちはおとなしくなり, たとえ火の中に投げ込まれようと, 火には露が滴って, 燃え上がることもなくなるのである。夜間に証明され, 昼間にも証明が行われる。言葉において, 生命において, 生き方において証明が為される。2) <親友> (ホロス『ヂュッペイ』 19.179) として, 主とともに住む者となり, 霊における共食者として留まるのである。肉において浄らか, 心において浄らか, 言葉において聖化された存在である。3) 使徒は言っている。<この世はわたしとともに十字架に付けられており, わたしは世とともに十字架に付けられているのである> (ガラヤ 6,14)。この使徒は, 救い主の十字架を担って主に従い, <

神の御跡にしたがって> (ホロス『テュッセイア』2.406)、聖者中の聖者となったのである。

105.1) したがって、すべての徳に言及しつつ、神的な法は人間をとりわけ克己に向けて磨き上げる。克己を、諸徳の礎として規定しているのである。また神的な法は、われわれを、諸動物に対する用い方を通じて克己の獲得へと予め教育する。その際、たとえば豚のようなまるまると肉太りした種が得ているような、本性的に肥えた部分に与かることを禁止している。というのもそのような用い方は放縦な生き方へと導くからである。2) 実に、哲学者たちの中で語源的解釈を好む者は、豚 (hys) とは殺戮 (thys) であると主張しているとされる。すなわち豚は、殺戮と切り裂きにのみ適うというのである。というのもこの動物に靈魂を売り渡すことは、肉を膨張させるため以外の何の意味もないからである。3) しかるに魚に与かることも禁じられているが、これはわれわれの欲望がエラやウロコのある生き物のものにならないように命じているのである。というのもこれらの部分は、魚の他の部分の肉付きや肥沃さと異なるからである。106.1) ここでわたしが思うに、秘儀を見出した者として、何か動物に触れることを禁じているのであろう。そればかりではなく、いけにえに捧げられたものの一部であっても、それを用いることは、秘儀伝授者たちの知っている理由により控えるということなのであろう。

2) さて、もし腹部と、腹部の下にある部位は制しなければならないということであれば、われわれは天上の主の許から、欲望はこれを打ち砕かねばならないという教えを受け取っている。もし欲望、言い換えれば快楽の刺激性を紛れもなくよく知っているならば、これは完遂したいものである。3) 快楽に属す思惟上の動きは、何らかの感覚を伴って、滑らかかつ優しいものとなると言われている。4) この快楽に隷属したからこそ、かのメネラオスは、トロイアの陥落の後、あれほどまでの諸悪の原因であったヘレネを、亡きものにせんと逸ったものの、それでも彼女の美に打ち負かされ、それを実行するだけの力がなかったとされる。快楽の記憶が蘇ってきたためである。107.1) そこから悲劇作者たちは、嘲笑を込め、批判を交えて彼に向かってこう叫ぶ。

「そこでおまえは、胸を見るや、剣を抜き、  
接吻を授けた、裏切り者の犬にへつらいながら」

(エウリピデス『アントロケ』629 以下)。

あるいはまた、

「いったい、剣は美に向かって叫びを挙げるのだろうか」

(イウリ<sup>o</sup>デス『オレステス』1287).

2) だがわたしはアンティステネスに同意する。彼はこう言っている。〈もしわたしがアフロディテを手に入れたなら、矢で射抜くことだろう。なぜなら彼女は、われわれの多くの美しく善き婦人たちを墮落させてきたからだ〉(アンティステネス、断片 11.1)。3) 彼は性愛を本性上の悪だと言っているのである。この性愛に屈する気性邪悪な者どもが、神のことを病気だと呼ぶのである。というのもこれらによって、快樂に対する無知ゆえに、邪気のない者たちが打ち負かされるからである。快樂というものは、たとえ神と語られようとも、進行させてはならないものである。すなわち、たとえ神から、子孫創生の必要からたまたま与えられたものであるにしてもである。4) またクセノフォンは快樂のことをまぎれもなく「悪」だと呼んでいる。〈おお辛抱強き者よ、何故におまえは快樂を善だと考え、またなぜ美だと思うのか。快樂よ、お前は、快き事物の欲情を待ってはくれないし、飢える前に食べ、渴く前に飲み、あなたが快樂とともに食べるように、つまみを作り出すものなのだ。5) だがもしおまえが快く飲むならば、高価な酒を備え、夏の雪を見回して求める。もっともそれはあなたが安眠できるようにするためなのであり、やわらかい寝台ばかりでなく、寝台を足台に備えて作るのだ〉(クセノフォン『ソクラテスの想い出』2.1.30)。108.1) ことから、アリストンが言うように〈四弦のものに対しては、つまり快樂・苦痛・恐怖・欲望に対しては、大いに鍛錬と闘いが必要なのだ。

「なぜならこれらのものこそ、これらこそはらわたを通過して  
内に入り込み、人間の心を不穩にさせるからだ」。

〈というのも〉、プラトンによれば、〈崇高なる事どもを思索していても、快樂は氣概(thymos)を蜜蝋のようになやかにしてしまう〉(プラトン『法律』633B)。〈なぜなら、各々の快樂や苦痛は、靈魂を肉体に釘付けにしてしまうからだ〉(プラトン『ファイドン』83D)。これは、自らを諸々の情動から結界し十字架に貼り付けにしていなかった場合に生ずる。3) 主は言われる。〈自らの靈魂を失うものは、それを救い取るであろう〉(マタイ 10,39)。これは、主自身がわれわれのためにそうされたように、後先を考慮することなく救い主に自らの靈魂を明け渡す場合、ないし自らの靈魂を、住み慣れた生への馴れ合いから解放する場合である。4) というのももし、自らの靈魂を、生きることの内なる悦びと快樂から解き放ち、引き離し、結界しようと望むとき(これこそ十字架の意味するところである)、あなたは靈魂を、来たるべき希望のうちに〈見出し〉、安らぎを得るであろうから。109.1) 〈これは死への配慮となるだろう〉(プラ



ト『ファイトン』81A)。すなわち、もしわれわれが本性に従って測り取られた欲求だけに関して、本性に過ぎることあるいは本性に反することを何ら異化することなく、満足させようと欲するならば、そこには過ちが生え出る。2) <だから、悪魔の策略に対抗して立つことができるように、神の武具を身につけよ>。なぜなら<われわれの戦いの武器は肉のものではなく、神に由来する力であって、要塞も破壊することができる。われわれは理屈を打ち破り、神の覚知に逆らうあらゆる高慢を打ち倒し、あらゆる思惑を捕虜にしてキリストに従わせよう>（2コリント10,4-5）と神的な使徒は言っている。3) 人間に必要なのは、それによって情動が駆られる問題に対して、驚くことなく混乱なく対処しうることであり、その問題とはたとえば、富、貧困、名誉、不名誉、健康、病氣、生命、死、苦痛、快楽などである。4) というのも善悪無記（adiaphora）なるものに対して、感情を交えずに対処するためには、われわれには多くの傑出した面が必要不可欠である。なぜならわれわれは、幾多の弱さと早まった錯綜により墮落していて、無学ゆえに悪しき行状と育ち方をすでに享受してしまっているからである。110.1) というわけで、われわれによる哲学の簡素な言葉は、情動とはすべて、柔らかく撓めやすい靈魂に遺された刻印であり、いわば「魂的な」（エフェソ6,12）力による印刻であって、その力に対して<われわれの格闘が行われる>としている。2) 思うに、悪しき働きを為す諸力の業とは、各々のものに、自らの習慣のなながしさを働きかけようと試みることであり、拒否する者たちに対して、それに打ち勝ち、おのが支配の下に置こうとすることである。3) 当然それに伴うのは、競技者精神に満ちてこの闘技に参加し、全力で闘い、栄冠にまで至らんとする者たちを、転覆させてしまうということである。上述の諸力は、多くの血を流しつつ勝利を収めようとする者たちを、驚嘆しつつも挫かんとするのである。

4) というのも、運動するもののうち、たとえば諸動物のように、衝動と幻覚によって動くものがある一方、靈魂を有しないもののように、移動によって動くものもある。しかるに靈魂を有しないものの中でも、植物は散漫に運動しつつ生長すると言われる。ただしこれは、植物も靈魂を有しないものに属すると認める場合の話である。111.1) かくして石は状態に、植物は本性に、いま述べた2つのものおよび理性を持たない動物は、衝動と幻覚において運動に関わる。2) しかるに理性的な力は、人間の持つ靈魂に固有のものであるが、理性を持たない動物に対して同じように駆り立て働きかけるということはありません、むしろ幻覚を識別し、それらによって錯乱させられないようにすることが

務めである。

3) かくして前述した諸力は、美や名誉や姦淫や快樂、あるいはそういった類の幻覚を、その傾きのある靈魂に対し、畏に満ちた形で提示してくる。それはちょうど、家畜を駆る者が、若枝をかざして振るようなものである。その後、真なる快樂と偽りの快樂を、また聖なる美と死すべき傲慢な美を識別することのできない者たちを出し抜き、隷属化させて引き立てて行くのである。4) 各々の迷妄は、休むことなく靈魂にもたれかかり、靈魂のうちに幻覚を形成する。そして靈魂が知らずして情動の像をまとうや、畏とわれわれの同意による原因が成立するのである。

112.1) さて、バシレイデスに従う者たちは、情動のことを習慣的に「付属物」(prosartēmata) と呼び習わす。そしてこれらを、実体としてなんらか息吹のようなもので、理性的靈魂に依存し、何らか混乱した支配的な混交であるとしている。さらにこれらの他に、息吹の庶子にして異質な本性を、別に靈魂から生え出でさせている。それはたとえばオオカミ、サル、ライオン、ヤギの息吹のようなものである。彼らによれば、靈魂をめぐって幻覚として現れるそれらの特質は、靈魂の欲望を各動物に似たものに同化させてゆくのだと言っている。2) というのも何の特質を帯びているかによって、その業を模倣するようになり、理性を持たない動物の衝動や幻覚に同化してゆくばかりでなく、植物の属性的な特性を帯びることで、植物の美しさや美をも希求するからだとされる。113.1) 彼らによれば、ついにはそれは、状態の特性、たとえばダイヤモンドの頑なさを模倣するまでに至ると言う。

2) しかしながら、われわれはこのような教説に対して、後ほど靈魂について扱う際に討論を試みることにしよう(『ストロマテイス』3.3.13.3)。いま注記しておかねばならないのは、バシレイデスの徒が、いわば詩作品における木馬の像(プラトン『テイテス』184D)ほどにまで多くの様々な息吹の軍勢を、一つの身体のうちに取り取って、救っているということである。3) バシレイデスの息子のイシドロス自身、『付加した靈魂について』と題する著作のなかで、この教説に気づき、あたかも自分自身を批判するかのごとくに、およそ次のように記している。4) くもしあなたが誰かに、靈魂が単一組織のものではなく、付加物の力によって、より劣ったものへの情動が生じるのだということの証左を与えるならば、人々の中で悪辣な者どもは、次のような偶然ならざる言い訳を述べることができるだろう。すなわち、「強いられた、かつがれた、嫌々やった、欲しなかったのに働かされた」などである。彼らは、悪に対する欲望だと

は思っていないのかも知れないが、実際は、付加物の力と戦ってはいないのである。114.1) しかるに、理性的思考によって力得上回った者は、われわれの内なる弱き被造物を支配するよう見えねばならないのである。2) この人間も、ピュタゴラスの徒と同様に、われわれのうちに二つの靈魂を仮定する。ピュタゴラスの徒については、後ほど検討を加える。3) だがそればかりでなく、ワレンティノスもまた、付加物について次のような言辞を用い、ある人々に宛てて記しているのである。<一人の方だけが善き方である。子による顕現とは、この方の自由意志による行為なのである。そしてこの方のみによって、心は、心の悪しき靈をすべて駆逐され、浄らかとなり得る。4) というのも心には、幾多の悪しき靈が住みついていて、浄らかとなることを許さない。その各々がここに固有の業を為し、相応しからざる欲望によって多様に奢っているからである。5) わたしには、心とは何か宿屋に似た面を被っているように思われる。すなわち宿屋は穴を穿たれ、掘り起こされて、しばしば、放縦に耽りその場に対してまったく気配り (pronoia) をしない人々の糞で満たされている。それはあたかも、誰か他人が住んでいるかのようである。6) それとちょうど同じように、心もまた、気配りを獲得するまでは浄らかでなく、多くの鬼神たちの住処となっている。しかしこの心を、かの唯一善き父が見そなわすとき、聖化され、光に照らされる。こうしてそのような心を有する者は幸いなる者とされて、神を見ることができるのである>。

115.1) では、そもそも最初から、このような靈魂が神慮 (pronoia) を得られない理由とは何であるのか、われわれに述べてほしい。つまり、靈魂がそれに値しないのか (まるで、回心をまっしてはじめて、神慮が靈魂に近づくとも言うのか)、もしくは主ご自身が望んでおられるように、本性的には靈魂が救われていて、当初から神慮により同起源性があるのだから、強いられない限りあるいは非力であることが証明されない限り、不浄なる靈にはいかなる余地も与えられないということなのか。2) というのももし、回心した靈魂がより優れたものを選択することを、主が叶えるのだとすれば、われわれにあって真理が是とした事柄をその人物が語るのは、説得されての回心であるがゆえに本性的ではないのであり、その救いは本性的なものとは言えないということになるからである。3) ちょうど、蒸散物が大地や沼から立ちのぼって霧となり、雲の固まりとなって嵐をもたらすように、肉的な欲望の発散が靈魂に不満をもたらし、靈魂の前に、快樂の偶像を撒き散らすというわけである。116.1) したがって、靈魂が思惟的な光によって、欲望からの蒸散を引き寄せて肥え太り、諸情

動の嵐に対し、快樂のしつこさで影を投げかけるということになろう。2) 金の塊は大地から取り出すことはできず、むしろ煮詰めることで濾過され、しかる後、浄化された金という名、浄められた大地という名を得ることになる。〈求めよ、そうすればあなた方に与えられるであろう〉(マタイ7,7) という言葉は、自らのうちからもっとも美しきものを選択することができる人々に語られたことである。3) われわれが、どのようにして悪魔の諸力が、不浄なる霊が、罪を犯した者の靈魂のうちに入り込むと言うのか、わたしには、多く言葉を連ねる必要はなく、むしろ使徒のバルナバを証人とするだけで十分だと思われる(彼は70人の弟子の一人であり、パウロの協力者でもあった)。彼はおよそ次のように述べる。〈われわれが神を信じる以前は、われわれの心の住まいは死すべきで弱いものであり、まさしく「手で作られた神殿」であった。しかしその心が、神に敵対するものを実行することにより、偶像崇拜に満たされて鬼神の家となってしまうのである〉。117.1) 使徒は、鬼神に特有の力動性(energeia)を成就する者を「罪人」と呼んでいるのであって、そのような霊そのものが、不信仰な者の靈魂のうちに住んでいると言っているのではない。2) それゆえ、彼はこうも付言している。〈主の家が相応しく建てられるように、注意せよ。どのようにであろうか。学ぶがよい。罪の赦しを得て、主の名に希望を置き、新たにされよ。もう一度、最初から創造されよ〉。3) というのも使徒が述べているのは、われわれの悪霊が駆逐されるのではなく、罪が赦される、ということなのである。われわれは信じるまでの間、かの悪霊と同じように、この罪を行っているのである。4) そこで使徒は、付加した言葉を相応しく言い換えている。〈それゆえわれわれの住まいにあって、真に神がわれわれのうちに住んでいるのである。どのようにであろうか。主の信の言葉、主の福音の呼びかけ、正義をめぐる知恵、教えの掟として、である〉(『バルナの書簡』16.7-9)。5) わたしは、自分がある異端に対して攻撃を行っていることを知っている。この異端を奉ずる者は、快樂という名を用いて快樂と戦っていると言っている。「真正なる覚知者は、仮想の戦いを通じて快樂を回避する」と(彼は自らも覚知者だと言っている)。試みに遭わずして快樂から逃れること、快樂のうちにあっても打ち負かされないこと、だから快樂によって快樂のうちに鍛錬されることは、大して困難ではない、と彼は言う。118.1) しかしながら、衰れなる者は、快樂を愛する技巧によって、知らずして自らを欺いている。2) すなわち明らかにこの憶念の点で、キュレネのアリステイッポスは真理を豪語するソフィストに攻撃を加えているのである。実に彼は、遊女のコリンティアに休みなく語

りかけていることのゆえに叱責され、こう言った。〈わたしは、ライスを掴まえているのであって、彼女によって掴まられているのではない〉（ディオゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝』2.75）。3) ニコラオスの徒であると自称している者どもも、この類の人々である。彼らはその男の護符のようなものを、護身のために携えていて、〈肉体は濫用せねばならない〉と言っている。4) しかしながら、真正なる人間は、快楽や欲望を打倒せねばならないということ、そして鍛錬によって、肉の衝動や試練を緩和させねばならないということ、これは明らかにしているのである。5) だが、ヤギの如くに快楽に身を任せる者は、肉体におごり高ぶる者と同様、快楽に身を滅ぼしているのであって、流れるものは本性的に散逸するのに、彼らの靈魂は悪の泥のうちに沈んでいるのだということを判っていない。これは快楽そのものの教説に追従しているものであって、使徒的人間の教えに従っているのではない。6) これらの者どもは、サルダナパッロスといかなる点で異なっているのであろうか。この男の生涯は、次のエピグラムが明らかにしている。

「わたしがいま手にしているのは、わたしが食べ、誇り、愛欲をもつて

喜びを味わったもの。だがまだ多くの幸いなる事柄が残っている。

わたしは灰、偉大なるニノス王すら支配する」

（7テイトス『饗宴の賢人たち』336A）。

7) つまり快楽の情動は不可欠なものではなく、何らかの本性的な必要、すなわち飢え、渇き、寒さ、結婚といった類のものに相伴うものなのである。119.1) したがってもし、快楽を抜きにして飲んだり、食物を摂ったり、子供を儲けたりすることができるのであれば、快楽の他の必要性はないということが示されるであろう。2) なぜなら快楽とは、エネルギーでも、気質でも、われわれの一部分でもなく、奉仕のために生命に入り込んで来たものだからである。ちょうど、食物を調理するための塩を言うようなものである。3) しかるに快楽が反乱を起こし、家を牛耳ってしまうと、愛欲的な欲望を生み出す。そのこの快楽を味わった者の持つ欲求と衝動は非理性的なものであり、この快楽は、かのエピクロスをして、哲学者にとっての最終目的である、という説を立てさせたほどなのである。実に彼は、〈肉体のよく整えられた状態、肉をめぐる信ある希望〉（エピクロス、断片68）を神格化しているのであるから。5) 放縦とは、快楽を愛する貪欲であり、快感情を追い求める者たちの余分な行き過ぎ以外の何

ものであろうか。6) ディオゲネスは、ある悲劇作品の中で、強調的に次のように記している。

「男性的でなく、汚らわしい放縱の徒は、  
 快樂のために、心において呻吟し、  
 少なからず、労苦することを欲している」。

以下、恥ずべき仕方で、もっとも快樂を愛する者には相応しく語られたことがそれである。

120.1) それゆえわたしには、神的な法は、恐れを必須のものとして差し掛けているように思われる。それは敬神の念と集中力をもって、哲学者が思い煩いのなさを獲得し、護り抜くためである。その際、すべてにおいて躓くことなくまた誤ることなく持続するのだからなければならない。2) というのも平安と自由は、われわれの情動に対する止むことも倦むこともない闘いを通して以外には、獲得されえないからである。3) 彼らは厳格な闘争者で、オリュンピア競技祭の競技者よろしく、いわば蜂よりも鋭い。またとりわけ快樂は、日中ばかりでなく夜間にも夢の中に現れ、魔術をもって罾を仕掛け、姦策を案じて嘯み付いてくる。4) さらに、正しきギリシア人たちが、律法を追究し、恐れをもって彼らもまた快樂を隷属化させることを教えているのはどういうことなのであろうか。5) 実際ソクラテスは、飢えていないのに食べることを、渴いていないのに飲むことを、美しき人々の顔つきや接吻が、サソリや毒グモよりも厄介な毒をもたらす性質のものであることに警戒するよう命じている。121.1) またアンティステネスは、悦びを感じるよりも狂気に陥るほうをむしろ選び取り、テバイのクラテスも、

「彼女は、靈魂の状態において勝利を得、彼らを支配する。  
 黄金にも、憧れで疲弊させる愛欲にも隷属することなく、  
 虚傲の友の道連れになることもなく」 (クラテス、断片3,8,9)。

さらに、その全体像を付言している。

「彼らは、卑しい快樂に隷属することなく、撓むこともなく、  
 不死なる王国と自由とを愛する」。

2) この人物は、他の著作においても、性愛に向かう歯止めの利かない衝動の湿布剤が、悪疫であるか、もしそうでなくても、繩であるということを、率直に書き記している。3) 一方ストア派のゼノンに対し、喜劇詩人たちは、彼の教説が真実であるということを、いささか揶揄しつつではあるが、こう語っている。

「この男は、新しい哲学を哲学した。  
飢えを教え、弟子を取った。  
パンは一つ、おかずは干しイチジク、水を飲むだけと教えて」  
(フィルモン、断片 85).

122.1) これらの人々はすべて、敬神の念に発する恩恵に対し、恥じることなく明確に同意している。しかるに真実にして理性を伴った智慧は、単なる言葉や託宣を信じるのではなく、傷つけられえない守り、激烈なる神秘、神的な掟に信を置く。その際、相伴う鍛錬や修道に配慮し、神的な力の息吹を帯びた部分に倣い、その力を御言葉から受け取る。2) すでに彼らは、創造者たるゼウスの楯を次のように記している。

「その楯は恐ろしきもの、一面にすべて恐れが被せられていて、  
あるところには争い、力、また冷たい追跡が見える。  
はたまた、恐ろしき怪物ゴルゴンの首もある。  
それは恐ろしく、力に満ちた、楯をたもつゼウスの脅威」  
(ホメロス『イリアス』 5.739 – 742).

123.1) このように、救いを真っ直ぐに見通すことのできた人々に、律法の峻厳性、その娘である敬神の念よりもいとおいしいものが映るのかどうか、わたしは知らない。2) というのも、「高い調子で歌う」と言われるのは、主もある人々に対して行うことであるが、その人を妬む誰かが、外れて狂った調子で歌うことのないようにするためである。ちょうどそれと同じように、わたしが聞くところによると、それは高い調子というものではなくて、神的なくびきを負うことを望まぬ人々にとって高い調子ということになるのである。なぜなら、調子外れで弱い性質の人々にとって、その音調は高い調子に、また不正なる者どもにとって、厳粛に正確なものは越えすぎたものに思われるからである。3) というのも、過ちに対して優しくあることを通じて馴れ合い性が入りこんで来るような人々であれば、真理を艱難と受け取るであろうし、厳格さを厳しすぎと、同じように過ちを犯さず共に引き倒されないような者を憐れみに欠けた者だと見なすだろうからである。124.1) 実に悲劇作品は、冥府について次のように巧みに記している。

「あなたがそこへ赴く場所には、老人がいるでしょう。  
彼はきっと、適わしきことや優美さを知らず、  
ただ単に正義だけを愛してきた人です」

(ソフォクレス、典拠不詳断片 703).

2) というのももしあなたが、できる限りにおいて、律法によって命じられた事柄を実行するということがなくとも、律法のうちには、われわれにとって最も美しい教えが収められてあるのだということを見抜き、自由への愛を育み増し高めることができるはずなのである。3) そうすることによってわれわれは恩恵を受け、力の限りいっそう熱心に、ある事柄には挑戦し、ある事柄は模倣し、ある事柄に関しては拒絶さえするのである。3) というのも古の正しき人々は、律法に従って生きていたわけでも、「柵の木や石から生まれたわけでもない」(ホロス『オグジュセア』19.163)。彼らは真正に哲学することを望むことによって、自らの全体を神に奉獻し、〈信厚き者と認められた〉(創世15,6)のである。

125.1) ゼノンは、インド人に関していとも美しく記述し、一人のよく日に焼けたインド人が、労苦に関するすべての証拠を、見たり学んだりしたいと欲していると述べている(ゼノン、断片241アルム)。2) しかるにわれわれにとっては、証し人たちの豊かな泉があり、日々、われわれの眼で、焼かれたり、柱上に吊るされたり、首を刎ねられたりする証し人たちがいる。3) 彼らはすべて、法の前での恐れがキリストに向けて訓導し鍛錬して、敬神の念を血によってさえ示すよう導かれた人々なのである。4) 〈神は神々の集会の場に立ち、その中央で、神々に判決を下す〉(詩篇81,1)。この神々とは誰のことであろうか。快樂に打ち勝ち、情動を超え出で、自分たちがおこなってきた事の各々を知悉しており、覚知者であり、世よりも偉大なる者たちである。5) さらにはまた、〈わたしは言った。あなた方は神々であり、すべて、いと高き方の子らである〉(詩篇81,6)と言われる。主は誰に対して語りかけているのであろうか。可能な限りにおいて、人間的な事どもをすべて拒んだ人々に対してである。6) 使徒もこう述べている。〈あなた方は、もはや肉のうちにあるのではなく、霊のうちにあるのだ〉(ロ-マ8,9)。さらにはまたこう述べている。〈われわれは、肉のうちにありながら、肉に従って戦っているのではない〉(2コリト10,3)。〈なぜなら肉と血は、神の王国を受け継ぐことはできず、妬みが、妬みのなさを受け継ぐこともできない〉(1コリト15,50)。〈見よ、あなた方は人間として死んで行くのだ〉。彼が述べているのは、われわれを吟味する霊のことである。

126.1) かくしてわれわれは、情動に屈する部分をめぐり、自己自身を敬神の念に向けて鍛え上げる。真なる哲学者たちに倣い、食物に関して渴欲を覚える部分を打破し、寝台における安逸な惰性、放縱、放縱に向かう情動を打ち棄てる。他の人々にとってこの闘争は重いものであるが、われわれにとってはもはやそうではない。神からの最大の贈り物、節制が与えられているからである。



2) <神自らがこう語った。「わたしは決してあなたから離れず、決してあなたを捨て置かない」> (ヘブライ 13,5; 申命 31,6,8). 3) これは、真正なる選択によってそれに適う者と認められた場合のことである。3) かくして、主の<憐れみ深く深く> (マタイ 11,30) は、敬神の念をもって近づこうと努めるわれわれのこを受け入れてくださる。その接近とは、<信仰から信仰へと>、一人の御者が、一歩ずつわれわれの各々を救いへと駆る歩みである。それは、幸福の相応しき実りが完成することを目標とする。4) コス島のヒッポクラテスによれば、<鍛錬とは>、肉体面のみならず、<健全な靈魂の、労苦を厭わぬが、食糧は適度のもの>だという (ヒッポクラテス『療法』6.4.18)。

## XXI. 人間の終末に関する諸哲学者の見解.

127.1) 一方エピクロスは、飢えないこと、渴かないこと、寒さに震えないことの中に幸福を置く (エピクロス、断片 602)。そしてその神にも等しい声を挙げ、不敬虔にも、その説のうちに、父なるゼウス・神と戦いを始めると宣言している。それは、言わば泥を食む豚のさまであり、至福の勝利を宣言する理性的人物・哲学者の姿ではない。つまり、快樂から出発する者たちの中には、キュレネ派とエピクロスが見出されるのである。2) というのもキュレネ派は、快樂のうちに生きることこそ究極の目的であると明瞭に述べており、最終的善とは唯一快樂に他ならないというのである。一方エピクロスは、苦痛の除去をも快樂と述べている。彼が言うには、まずもって自らから発して自らへと引きつけるものこそ選び取るべきであるということであるが、これはいとも明らかなことに、運動のうちにあるものという意味である。3) 一方デイノマコスとカリフォンは、快樂を獲得しこれを手中にするために自発的に行う事柄こそ最終目的だとする。またペリパトス派のヒエロニュモスも、煩わされることなく生きることこそ最終目的であり、幸福とは最終的な唯一の善であるとする。ディオドロスもまた同様に、同じ異端から出発して煩わされることなく美しく生きることこそ最終目的であると表明している。128.1) かくしてエピクロスとキュレネ派は、固有の第一のものとは快樂であると述べたのである。というのも彼らによれば、徳は快樂のために過ぎ去るが、徳が快樂を生んだのである。2) またカリフォンの徒によれば、快樂のために徳が添えてやって来るのであるが、時間的には後に、徳をめぐる美が自らを、発端すなわち快樂と同じ尊厳を持つものと見なし、おのれを提供したのである、とされる。

3) 一方アリストテレスの徒たちは、徳に従って生きることこそ目的であると表明しているが、徳を有している人のすべてに幸福や目的が存しているとは考えていない。というのも試練を受けて、意に反した運命に堕ちた賢者が、そのために雄雄しく生きることから逃れたいと望み、幸福でありたいとも至福でありたいとも願わなくなることがある。4) 徳の成立のためには、ある一定の時間が必須だという。徳は、一日にして成るものではなく、完全なる人間において成立するものである。つまり、彼らが言うには、幸福なる子供というものは、およそあり得ないのである。だがそうになると、人間の一生は完全性に向かう時間とならねばならない。5) そういうわけで、幸福とは善の三重の構造で満たされる。したがって貧しき者も、名誉なき者も、病に罹った者も、僕である者も、それ自体として幸福ではない、というのである。

129.1) 一方ストア派のゼノンは、徳に従って生きることこそ最終目的であると考えたが、同じくクレアンテスは、自然本性に適うように生きることが目的だと考えた。またディオゲネスは、賢慮のうちにあることこそ目的であると考えたが、彼は、賢慮のうちにあることとは、本性に従った事どもの選択にあると考えていた。2) 一方この人物の知友であるアンティパトロスは、本性に従った事柄を、常にまた逸脱することなく選択する一方、本性に反するものを選び取らないことのうちに、目的が存在すると理解していた。3) アルケデモスもまた、次のことのうちに目的が存すると説明した。それはすなわち、本性に従った最大かつ最も勝義的なるものを選択しつつ、乗り越えることのできる事柄は選ばないで生きる、ということであった。4) 彼らに加えて、パナイティオスは、本性的にわれわれに与えられた端緒に則って生きることこそ目的であると公言していた。彼ら全てに加えてポセイドニオスは、生きるとは、万物をめぐって真理と秩序とを観想し、自らを可能な限りそれに倣って備えることであるとした。その際、靈魂の非理性的部分に関しては、何事にも動かされないこと、と彼は注記する。5) 一方、新進のストア派の人々のある者たちは、次のように表明している。すなわち目的とは、人間の構造的性質(kataskeuē)に従って生きることである、というのである。6) アリストンに対しては、どうしてここに教え挙げようか。この人物は、目的とは善悪無記であると述べているが、善悪無記とは善悪無記であるとして放置しているのである。7) あるいはエリッロスの見解をここに提示すべきだろうか。彼は、目的とは知識(epistēmē)に従って生きることであると規定している。8) アカデメイア派の新進の人々に関して、ある者はこれを善しとしているが、彼らは、目的とは幻覚に対して躡くことな

く判断停止を行うことだとしているのである。9) 実に、ペリパトス派のリュコンは、靈魂の真なる喜びこそ目的だとし、これはレウキッポスが、美に則った喜びこそ目的だとしているのと同様である。10) 一方クリトラオスは、かれもまたペリパトス派なのであるが、本性に従った成功裏の人生こそ目的性であると述べている。これは三つの種類に満たされた三重の目的性を意味するものである。

130.1) われわれとしては、以上をもって十分としてここで止めるべきではなく、むしろできる限り区別をはっきりさせつつ、本性的な事柄をめぐり、当該の問題に関して教説化された事柄を提示することに努めよう。2) まずクラゾメナイの人アナクサゴラスは、人生の目的とは観想であり、観想を通じての自由であると言ったとされている。一方、エフェソスの人ヘラクレイトスも、それは満足であると言ったとされる。3) 一方ポントスの人ヘラクレイデスは、ピュタゴラスが、靈魂の幸福とは数の完全性に関する知識であるということを知を伝授した、と述べている。4) だがそればかりではなく、アプデラの人々もまた、目的が存在すると教えている。まずデモクリトスは、『目的について』と題する著書の中で、それは喜びであるとし、彼はこれを「繁栄」(euestō)と名づけている(またしばしば彼は、こう付言している。〈悦びと、悦びのなさ、それこそ、適切さと不適切さの見張りである〉)。一方ヘカタイオスは、これを「自足」であるとしている。5) 一方、キュジコスの人アポッロドロスは「靈魂の導き」であるとした。これはナウシファネスが「沈着」だとしたのと似ている。なぜならそれは、デモクリトスによって「冷静」と語られたものだからである。6) さらに彼らに加えて、ディオティモスは「諸善の充足」としているが、これは「繁栄」(euestō)と名づけられ、目的であると表明されている。7) さらにアンティステネスは、「虚傲のなさ」(atyphia)であるとし、一方キュレナイカの後継者から「アンニケレイオイ」と呼ばれている者たちは、全生涯の目的を何ら定義づけられなかった。すなわち、個々の行為には各々固有の目的が存在し、それはその行為から生じるところの快楽であると述べたのである。9) これらのキュレネ学派は、エピクロスによる快楽の定義、すなわち「苦痛をもたらすものの除去」を拒絶した。彼らはこの定義を「死者の状態」と呼んだのである。というのもわれわれは、快楽にばかりではなく、語らいあいや名誉を愛する心のうちにも喜びを見出すからである。9)しかるにエピクロスは、靈魂のすべての喜びは、まず肉体が先に被り、その上に成立すると考えている。131.1) またメトロドロスも『より大なるものについて』の中で、われわれの

許での幸福に関わる原因とは、事物から発するものであるとして、「靈魂の善とは、肉の繁栄した状態であり、肉をめぐる信頼しうる希望以外の、他の何物であろうか」と述べているのである。

## XXII. プラトンによる人間の最高善.

2) 実に、かの哲学者プラトンは、目的とは二重であり、一方は分有され得て、すでにまづイデアそれ自体のうちに存し、「善」とも名づけられるものであり、もう一方は、これを分有し、そこから類似したものを受け取るものであり、徳と真なる愛智を自らのものとなす人々において生ずる、としている。3) それゆえクレアンテスも『快樂について』の第2巻においてこう述べている。<ソクラテスは、あらゆる場合において「正しき人間と幸福なる人間とは同一者であり」、「正義を利得から切り離すような前者を、何か不敬なことを為した人物として呪う」ことを教えていた>と。というのも実際不敬者とは、営利を法に従った正義から切り離す人物だからである。4) その同じプラトンは、幸福とは<ダイモンを善く持つ>ことであり、ダイモンとは<われわれの靈魂の主導的部分であると言われ>、幸福とは<最も完全で豊かな善である>と述べている(プラトン『ティマイオス』90C)。5) また彼は、幸福のことを<同意され、共和する生>と呼んでいる。そこで彼は、またあるとき、徳に関しての完全性を、善に関わる知識と、神に対する類似のうちに置き、類似とは「節慮をともなった義と敬虔さである」と言っている。6) ここで、われわれのうちのある者たちは、人間は創造の際に(創世 1,26)、<像として>の性格を直ちに受け取ったにしても、後に<似姿として>、その完全性に照らして受け取ることになった、と理解しているのが思い起こされる。132.1) まさしくかのプラトンが、この「似姿性」は、有徳の人には謙遜さ(tapeinophrosynē)を伴ったかたちで存するということを教え、解釈している。<すべて、自らを低くする者は高くされる>(ルカ 14,11)。プラトンは『法律』篇の中でこう述べているのである。<神は、いにしえの論述と同じく、すべてに関して始め・中・終わりを有する方であり、歩き経巡りながら、本性に従い、直線をもって区切る方である。そしてこの神には常に、神の法を逸脱する者どもに対する報復者、すなわち正義が相伴うのである>(プラトン『法律』715E-716A)。3) プラトンがどのようなかたちで、敬神の念を神的な法に付与しているか、おわかりであろうか。彼はこう付言する。<幸福になろうとする者は、この正義のうちにあり、謙遜に、

そして慎ましやかにこれに付き随うのである>。4) しかる後、これらの事どもの帰結を総括しながら、恐れをもって道を正しつつ、こう付言する。<いいいかなる行為が、神に好ましく、神の意に適うのであろうか。それはただ一つ、古の言葉を内包している事柄、すなわち似たものが、似たもの・規準を叶えたものにとって親しいのであり、規準を超えたものは、互いにとっても、規準を叶えたものにとっても、好ましくないのである。したがって、神に好ましき者となろうとする者は、可能な限り、自らもまた、そのような者とならねばならない。133.1) そしてまさにこれと同じ論理により、われわれの中で賢慮を備えた者は神の友であり、神に似た人である。そして賢慮を備えていない者は、神に似ず、神とは異なった者なのである> (プラトン『法律』716CD)。2) 彼は、これを古に遡る教説であると言いつつ、律法から彼プラトンの許にまで届いた教えを暗示している。3) 彼は『テアイテトス』篇においても、死すべき本性ゆえ諸悪、またその場所が、必要に迫られて徘徊することを認めながら、次のように付言している。<それゆえ、できるだけ速やかに、この世からあの世へと逃れねばならない。なぜなら逃避とは、可能な限りで神に似ることだからである。しかるに「似ること」とは、賢慮を備えつつ正しくかつ敬虔な者となることである> (プラトン『テアイテトス』176AB)。4) プラトンの甥であるスペウシッポスもまた、幸福とは、本性的にまったき習性の者たちの間でのまったき習性、ないし諸善に満ちた習性である、と述べている (スペウシッポス、断片194)。この状況に対しては、すべての人間たちが欲求を抱いているが、善き人々は、喧騒からの解放をも目指している、と彼は言う。おそらく徳とは、幸福をもたらすものなのであろう。5) 一方カルケドンの人クセノクラテスは、幸福とは固有の徳と、それに仕える力の獲得であると表明している。6) しかる後彼は、幸福がそこにおいて成立する場所として、靈魂を論じているように思われる。またそれによって幸福が成立するものとして、徳を語っているようである。一方、そこからその一部として成立するものとして、彼は、麗しき行為、真摯なる習性、行状、運動、静止を挙げている。一方、それなくしては成立しないものとして、肉体的なこと、あるいは外界の事がらが挙げられている。7) 一方クセノクラテスの弟子であるポレモンは、幸福として、すべての善、ないし最良のまた最大の善に充足している状態を思い描いているようである。彼は実に、徳なくしては決して幸福はあり得ないと教えており、その際、肉体的な、あるいは外界の条件を抜きにしては、徳は、幸福であることのために十全ではないと述べているのである。

134.1) 以上に関してはここまでで十分であるとし、上述の諸見解に対する反論を適宜提示することにしよう。ただわれわれとしては、終わりのない目的に到達することとは、掟すなわち神に従うこと、そして止むことなく掟に従って、神の意向をめぐる覚知を通じて自覚的に生きることのうちにある、と考える。2) さて正統な論理によれば、目的とは、いわば神に似ること (exhomoiosis) であり、子を通じて、完全に「子としての状態」(hyiothesia) に復興されること (apokatastasis) であるとされる。この「子としての状態」とは、われわれのことを<兄弟> (ヘブライ 2,11) また<共に嗣業に与かる者> (ロ-7 8,17) と呼ばれるに適う者とする偉大なる大祭司 (ヘブライ 4,14) を通じ、父に対して常に栄光を帰すことである。3) また使徒は、この目的を『ローマ人への書簡』の中で、簡潔に記述してこう述べている。<あなたがたは今、罪から解放されて神の僕となり、聖性に向けた実りを結んでいる。その目的とは、永遠の生命である> (ロ-7 6,22)。4) ここで彼は、希望を二重のかたちで目にしている。一つは将来期待されるもの、もう一方はすでに受け取ったものである。すでに彼は目的として、希望の復興ということを教えている。使徒は言う。<忍耐は練達を、練達は希望を産む。希望は欺くことがない。なぜなら神の愛がわれわれの心のうちに注がれ、それはわれわれに与えられた聖なる霊による> (ロ-7 5,4 以下)。この愛を通じて、希望に向かう復興が可能となる。他の箇所では、この復興が「休らい」としてわれわれに与えられると使徒は言っている。135.1) 同様の事柄は、エゼキエルのうちに、次のようなかたちで記されているのに気づく。すなわち<罪を犯した靈魂は、それ自体が死ぬ。もしある人が正しく、正義と恵みの業を行うならば、すなわち山の上で偶像への供え物を食さず、イスラエルの家の偶像に自らの目を上げず、隣人の妻を汚さず、生理中の妻に近づかず> (というのも彼は、人間の種子が浪費されることを望まないからである)、<また人を虐待せず、負債者の質を返却し、略奪を行わず、自らのパンを飢えた者に与え、裸の者に衣服を着せ、利息を天引きして金を貸すことをせず、高利を取らず、不正から自らの手を引き、人と隣人との間で正しい裁きを行い、わたしの掟のうちに歩み、真実を行えというわたしの掟を守るなら、その人は正しき人であり、生命のうちに生きる、と主なる神は言われる> (エゼキエル 18,4 - 9)。3) 一方イザヤは、信じている者に対しては生の崇高さに向け、また覚知者に対しては十分なる注意 (epistasis) に向けて勧告する一方、人間の徳と神の徳とが同一ではないということに関して、次のように表明しつつ述べている。4) <主を求めよ。主を見出し得るときに、主を呼び求めよ。主が

あなた方に近づくときに、不敬なる者は自らの道を、不法なる者は自らの道を離れて、主に立ち返れ。そうすれば憐れみを受けるであろう。これはあなた方の思っている事柄は、わたしの思いとはかけ離れている」という句で結ばれる（イザヤ55,6.7.9）。136.1）そして真正なる使徒によれば、〈われわれは、信仰に基づき正義の希望を受け取っている。キリストにあっては、割礼も無割礼も何の力もない。ただ愛を通じての信仰が働くだけである〉（ガラテヤ5,5）。2）しかるに〈われわれは、あなた方の各々が、希望の完成に至るまで、同じ熱心さを示してくれることを切に願う〉（ヘブライ6,11.20）が、それは〈メルキゼデクの身分の大祭司が永遠にそうであるように〉である。3）パウロと同様のことを、徳に満ちた知恵がこう述べている。〈わたしに聞き従う人は、希望に信頼して住まいを得るであろう〉（箴言1,33）。なぜなら希望の復興が、同じ意味で「希望」と語られているからである。4）それゆえ「住まいを得る」という表現に、いとも美しく「信頼して」と付加されるのである。これは、望んでいた希望を抱くそのような人は休らいを得る、ということを表している。かくしてこう続けられる。5）〈彼はあらゆる悪に対する恐れを免れて安穩を得る〉。5）一方使徒は、『コリントの教会に宛てた第一の書簡』において、いとも明瞭にこう述べている。〈わたしがキリストの模倣者であるように、あなた方はわたしに倣う者となって下さい〉（1コリント11,1）。その目的は次の事柄である。もしあなた方がわたしの、わたしがキリストの模倣者となれば、あなた方はキリストに倣う者となる。そのキリストは神に倣う者である。6）すなわち彼は、〈神に可能な限り正しく似た者となること、そして賢慮をともなった敬虔な者となること〉（プラトン『テイテス』176B）を信仰の目的として掲げているのである。要するにこれは、信仰に基づいた福音告知の復興である。こうして、これらの言葉から、目的に関して使徒が教説化した事どもの泉が、すでに述べたように、噴出している。だがこれらに関しては以上で十分であろう。

## XXII. 婚姻の目的と捉。

137.1) 結婚は快樂と情欲に屈することであるように思われる。したがってこの点についても取り上げねばならない。結婚とは、男性と女性との最初の交わりであり、律法に従い、正嫡の子を儲けるために行われる。2) 実に、喜劇作家のメナンドロスもこう述べている。

「正嫡の子供たちを授かるために、

わたしはあなたに、わたしの娘を与える」

(メンドロ断片 720, 『髪を切られた女』 38 以下).

3) そこで、われわれは結婚すべきかどうか、探求してみることにしよう。これは「関係性の問題」と呼ばれている事柄に属す (アリストテレス『弁論術』 2.2 ; 1379a9 以下)。誰が結婚すべきであり、どのようにして、また誰と、どんな女性と結婚すべきなのであろうか。誰しも皆、あるいは必ず結婚すべきであるというわけではなく、相応しき時、相応しき相手、そして相応しき年齢がある。4) 一方女性の側についても、すべての女性が必ずいつでも結婚すべきであるというわけではなく、是が非でもあるいは思うままにというわけでもなく、ただどのような男性と、どんな風にまたどのような形ですべきか、ということである。これは子供のために為されるものであり、すべての点で似つかわしく、愛する男性を大切に思う女性により為されるべきであり、決して力づくであるいは強いられて行われるものであってはならないものである。138.1) それゆえ、自分の妻を妹だと弁明していたアブラハムはこう言う。〈父方から言えば彼女はわたしの妹です、でも母方から言えばそうではありません。だからわたしは妻にしたのです〉(創世 20,12)。これは、母を同じくする女性と結婚してはならないということを教えるものである。

2) 簡潔にこの話を概観することにしよう。プラトンは結婚を、善き事どもの外にあることのうちに置いている。結婚は、われわれの種族の不滅性を準備し、いわば継続性として、子の子にまで点火されるものである (プラトン『法律』 773E)。3) しかるにデモクリトスは、結婚と子作りとを、そこから生じる幾多の不快や、不可避な事態から発生する消耗のために批判している (デモクリトス、断片 179N)。4) 彼と同調するのはエピクロスであり、彼においては、快楽と煩わしさのなさ、さらには苦痛のなさに含まれる事柄が善とされる。5) またストア派に属す人々によれば、結婚と育児とは、善悪無記とされる一方、ペリパトス派の人々によれば、それらは善であるとされる。6) 要するに彼らは、舌に至るまで教説を引き上げて、快楽に僕として仕えているのである。ある者は妾、またある者は遊女、そして大半の者は若者を用いている。しかるにかの知恵ある四人の女性は、遊女とともに労働のために快楽に身をささげている (アテナイオス 13.588B)。139.1) したがって彼ら、自分には何ら益することがないと判断して、他の者どもにこれをやるように命ずるような者、あるいはその逆のような者どもは、「ブズギオンの苦役」(くびきを負っての農耕) を免れることはないであろう。2) 聖書はこのことを簡潔に明らかにしてこう述べている。



＜あなたが憎むこと、それを他人にはしてはならない＞（ヒト4,15）。3）それはともかく、結婚を是認する者たちも、＜われわれの本性が、われわれを結婚に適ったものにしたのだ＞と言っている。すなわち明らかなことだが、身体作りからして、男性と女性に分かれているのであるし、＜増えよ、地を満たせ＞（創世1,28）と常に声がするのだから、というのである。4）だがもしこの件がそういう次第であるなら、このことは彼らにとって恥ずべき事柄で、かつ神によって創造された人間の方が、理性を備えていない諸動物よりも自制心がないと思われよう。すなわち動物は交合に際して、多くのものに見境なくこれを行うようには創造されていない。ただ一つの、それも同族のものつつがう。たとえば家鳩、小鳩、亀の類、およびこれに類した種に関してそうである。5）さらに、彼らが言うには、子供のない男性は、本性的な完全性から取り残されている、それは彼が、固有の世継ぎをその土地に立てることがないからである、というのも自らから似た者を創造するのがまったき存在であり、否むしろ、自らの子も同じことをするのを目にするとき、すなわち生まれた者が生んだ者と同じ本性になるとき、まったきあり方になるのである、と。

140.1) したがって、祖国のため、また子孫の継承のため、またわれわれに関わる限りでの世の完成のためには、ぜひとも結婚すべきだということになる。というのも詩人たちは、結婚しただけで、また子供のいない結婚は＜半完成品であり＞（ホロス『リアス』2.701）、＜両親とも健在＞（ホロス『リアス』22.496）な結婚を幸いなるものと呼んでいるからである。2) しかるに身体的な疾病は、とりわけ結婚を不可欠なものとして示す。なぜなら妻の気遣いと絶えざる忍耐は、他の親族や友人たちの辛抱に優ると思われるからである。それは相互の共感によって、すべてを乗り越えとりわけ耐え忍んでゆくことを選択する限りにおいてである。妻とは聖書によれば、まさしく不可欠な＜助け手＞（創世2,18）なのであるから。141.1) 実に、喜劇詩人のメナンドロスは、結婚に対して攻撃を加えながらも、次のように言う者に対し、結婚の有用性をも対置させながら、こう返答している。

「A. この件で、わたしは失敗した。

B. 君はそれを左手で受け取ったんだよ。

さらに彼は続けている。

「君は結婚のうちに、煩わしき面、君を悩ます面を見たのだ。

いい面には目を向けていないじゃないか」

（メナンドロス『女嫌い』断片325）

以下である。2) また結婚は、次の面でも助けになる。すなわち時間的に先行する人々に対して、面倒を見てくれる女性として妻を提示できる。また彼女から生まれた子供たちを、年老いてからの養い手とすることができる。3) 「子供たち」は、

「死に行く人間にとって、誉れとなる。

コルク樞が網を引っ張るように、

深みから、網の糸を救い上げてくれる」

(アイスキュロス『供養する女たち』505 - 507)。

とは悲劇詩人ソフォクレスの言である<sup>8</sup>。4) 一方立法者たちも、結婚していない者たちには、最高の官職に与かることを認めていない。すなわちラコニアの立法者は、結婚しない者に対してばかりでなく、悪しき結婚をした者、結婚が遅すぎた者、あるいは独身主義者に対して罰則を設けている。5) 一方真正なるプラトンは、妻の生活費を公的経費から拠出すべきこと、また結婚していない者に対しては、相応しき出費をアルコンに支払うべきことを命じている(プラトン『法律』774)。というのも、結婚せず子供も儲けなかったならば、自分たちのうえに人口の不足をもたらし、国家を滅ぼし、ひいては人々からなる世界を壊滅させるというのである。そのような不敬に関しては、神的な誕生の神秘を破壊させるに任せよう。142.1) 一方、すでに妻と子供がありながら、共棲を回避するというあり方は、男性的でもなく弱々しい。2) 共棲の回避は悪であり、総じて共棲の堅持は善である。これ以外の事柄に関しても同様である。だが実に、子供の回避は、最低の悪に属すことである、と言う。つまり、子供の獲得は善なのである。もしそうならば、結婚もそうである。

3) 「父がなければ子供もおらず、

母がなければこの懐胎もありえない」

(エウリピデス『オレスティス』554)。

結婚が父を作ると同時に、夫が母を作る。143.1) ホメロスもまた、最大の祈りを込める箇所として〈夫と家〉を挙げるが、そればかりでなく、〈善き協和〉があること、が伴う(ホメロス『オデュッセイア』6.181以下)。というのも、他の人々の結婚であれば、快楽に満ちた生に向けて合意するが、哲学する人々の結婚は、御言葉に基づいた合意を目指し、妻たちには、容姿ではなく品性において飾られるように勧告する。そして、結婚している女性に対しては、愛人でもあるかのように付き合うことはしないように勧告し、身体面での虚傲を目的としてきた男性に目を注ぐことのないように勧める。そしてむしろ結婚を、生涯

を通じての援助、最高の節制のための道とするように勧告するのである。2) 思うに、相応しい時期に蒔かれた小麦や大麦よりも、巻かれた人間の方が尊い。人間にはすべてが育つし、それは、しらふの状態では農夫たちが種を蒔くわけだからである。3) もし何か結婚に、汚く汚れたなりわいがあるのだとすれば、それはすべて浄めなければならない。これはわれわれが、理性を持たない動物の交合のほうが、人間の共なるくびきよりも、合意の定義から言って、より本性に合致しているとして非難されないためである。144.1) 動物たちの中には、定められた時期に交合を行い、それが済むと直ちに、神慮による創造行為を止め、離れてゆくというものがある。2) 悲劇詩人たちによって、ポリュクセネは喉を切られる際に、<死に行きつつも、なお気品を保って倒れるべく、大いなる神慮に与かって> (エウピテス『ハガ』568 - 570) いるように描かれている。

「彼女は、男たちの目を、閉ざすべくして閉ざした」。

彼女にとっても、結婚は不幸だったのである。3) したがって情動に屈し、情動に譲歩するというのは最たる隷属であり、それらに打ち勝つのは、言うまでもなく自由な意志だけの為せる業である。4) 実に、神的な聖書は、神の掟を破って他の種族と交わるという罪、すなわち本性的に適わしくない罪に試みられ、回心して立ち返るまでの経緯を記している（士師2,14 ほか）。

145.1) かくして婚姻に関しては、これを言わば聖なる像のように、汚れをもたらず事物から遠ざけ、浄らかなものに保たねばならない。主とともに眠りから覚め、感謝とともに眠りに就き、

「眠りに就くとき、また聖なる光が訪れる折りには」

(ハソトス『農と暦』339)

祈りを献げ、われわれの生涯のすべてにわたって主を証しし、靈魂においては敬神の念を失わず、思慮を肉体にまで及ぼすのである。2) というのも、舌から行いに至るまで品位を保つことは、まさしく神を愛することに他ならないからである。恥ずべき言説は無恥につながる道であり、両者の行き着く先は恥ずべき行動である。3) しかるに聖書は、結婚することを勧め、絆を解消しないように勧め、ただこう掟を定めるのみである。<不品行以外の理由で妻を離縁してはならない> (マタイ5,32)。姦淫とは、別れたもう一方の人が生きている間に、他に婚姻関係を結ぶことだと考えられている。146.1) しかるに、妻が節度を越えて化粧しない、あるいは身づくろいをしないということは、非難されるような嫌疑を招かないことにつながる。それは妻が熱心に祈りと祈願に専心し、家の多くの出口を見守り、相応しからざる者どもの視線から彼女を可能な限り

遮断しておき、自身を、不適切なおしゃべりよりも家事に適わしいものとする  
 ことにつながるのである。2) <出された妻を娶る者は姦淫を犯すのである>、  
 と主は語る。というのも、<もし誰かが妻を離縁するならば、彼女を姦淫する  
 のである>、すなわち姦淫するように強いる、というわけである。3) だが離  
 縁する者が姦淫の原因となるばかりでなく、彼女を受け容れる者も、妻に罪を  
 犯す端緒を提供するのであるから、その原因となるというのである。というの  
 ももし彼が彼女を受け容れることがなければ、妻は夫のもとに戻るであろうか  
 ら。147.1) いったい、法とは何であるのか。情動の改善を拓くために、姦通  
 を犯す女、その件で審議される女を取り除くシステムである。もし彼女が祭司  
 の娘であれば、火に委ねられるべきことを定めている (レビ 21,9)。その際、姦  
 夫のほうも石打ちにされるが、同じ場所においてではない。それは、死が人々  
 と共通のものとならないためである。2) 律法は福音と競合せず、福音と協和  
 するものである。どうしてそうでないことがあろうか、両者にとっての指揮者  
 は一人、主であるのに。もし過ちに身をゆだねて姦通した女がなお生きている  
 とするならば、掟のために死ぬが、もし回心し、いわば生まれ変わって、生の  
 転換によって生命の再生を得たならば、かつての姦通は死し、彼女は回心によっ  
 て再び生まれ、生命へと至るのである。3) いま述べた事柄を証言しているのは、  
 エゼキエルを通して語る霊である。<わたしは罪人の死を望まない。むしろ立  
 ち返ることを願う> (エゼキエル 33,11)。4) 心の頑なさのために律法に死ぬ者は、  
 ただちに石打ちに遇う。それはその人が律法に従わなかったためである。しか  
 るに懲罰は祭司の娘にも及ぶ。それは<より多く与えられる者からは、より多  
 く求められる> (ルカ 12,48) からである。

われわれの『ストロマテイス』第2巻は、その長さや章立てが大きくなって  
 しまったため、ここで筆を擱くことにする。

## 注

- 1 クレメンスは『パルナバの書簡』に、新約聖書に収められた他の使徒書と同  
 等の権威を置いている。
- 2 洗礼を受けぬまま他界した嬰兒たちを指す。
- 3 アッティカの王テセウスの妻。先妻の子に当たるヒッポリュトスに懸想した。
- 4 アルゴスの王プロイトスの妻。ベレロフォンに懸想したが、思いを遂げられ  
 ずに夫に訴え、それがもとでベレロフォンはリュキアのイオバテス王の許に  
 遣わされ、キマイラ退治を命じられる。
- 5 テバイを攻める7将のうち、アンフィアラオスの妻。ポリュネイケスにより

ハルモニアの首飾りを約束されて、夫で預言者のアンフィアラオスが、遠征を望まずに隠れている場所を明かした。

- 6 この部分、伝損する唯一の写本に欠損があり、シュテーリンによる補充読みに従う。
- 7 仏教〔密教〕において、「身・口・意」における如来への似姿への志向が説かれることを想起させる。
- 8 引用箇所にしたとおり、これはソフォクレスではなく、アイスキュロスの作品中に見出される台詞である。